

目 次

主師親の三徳	……………	本多
日蓮宗概観(其二)	……………	梶木
人生と法華經(其五)	……………	池ノ内
節分の夕	……………	磯部
法華經講話(第二十七講)	……………	小林
記事	……………	一 郎

○本部團報各地教信 ○寄附金維持及團費誌料領收

號月三年一十四第

統

一

法財人編
統一團發行

附團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ密所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

主師親の三徳

本多日生

今日は主・師・親の三徳と題してお話を申上げようと思ふのであります。佛法では報恩の思想は、これは阿含の最初から涅槃の終に至るまで佛法を貫いて居るところの大精神である、これが佛法の道徳である。何れの宗旨でも佛法にあつてはそれが人間の精神行爲を律するところの最も大事な基準となつて居ると思ふのである。

此の恩を知つて恩に報ゆるといふ報恩觀念といふものは、詳しく云へば小さい思から大きな恩と限なく人生は恩の繋がりでありませうけれども、其中に大きな恩が四つある、或は六つに數へられて居ります父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩、師匠の恩、夫婦の恩と、斯ういふ六恩の説があるのであります、其中の主・師・親の三徳といふと、父母の恩と、國王の恩と、師匠の恩と、三つを取つたので衆生の恩と三寶の恩と夫婦の恩といふのが裏へ隠れて居る。併しそれを棄てる意味ではないが、最も大事なものも三つ取るのである。それは大薩婆經には四恩として説かれ、法華經の本文に於ては主・師・親の三徳として説かれて居るのであります。兩方共能く心得なければならぬが、今日は三徳の側に就て

申上げるのであります。

日蓮聖人はあの開目鈔を書かれる場合に、開卷劈頭に於て「夫一切衆生の尊敬すべき者三ツあり所謂主・師・親これなり」と御書きになつて、開目鈔全篇の總標と申して總體を括つた言葉は、苟も生かとし生ける者、殊に人間として生れた以上は、主人と、師匠と、親との此の三つの恩を知つて之に報ゆる行が一番大事なこと、それが道徳であり、宗教であり、それが人間の精神行爲の基準であるといふことを書かれて居る。從來華嚴・眞言・天台・禪といふやうな方は面倒な學問のやうになつて居つて、其の温かな人格の主・師・親の三徳。主人・師匠・親の恩、そこが有難いのだといふやうに言はない、本來無一物と言つたり、或は教相判釋を細々とやつたりするやうなことをやつたりして居つて、直接吾々人間の忘れてならぬのは主・師・親の三徳であるといふやうに、そこへ説き込んで行つたことはい。これは日蓮聖人の教學上の精神の大發揮であるので、それが分らぬで一念三千がどうだと言つて、天台から流れて来て居る思想を彼れ是れ言ふ人が居るけれども、日蓮聖人が最も大切な開目鈔の開卷劈頭、哲學的議論を打破つて「夫一切衆生の尊敬すべき者三ツあり所謂主師親これなり」と書かれて人格の目標にされた所に其の炯眼大識があるのであります。それが分らぬからして何時までも教義上の中心思想がふらつくのであります。左様に日蓮聖人はお書きになつたが、法華經が無論それなのであります。日蓮聖人の意見に従へば法華經ばかりぢやない、一切の書物、儒・外・内、何を讀んでも皆主・師・親

の三徳を明にする爲に書かれてある。主・師・親の徳を忘れる位なら、何萬何千の書物を讀んでも何にもならぬといふのである。

だからして無論法華經の思想も主・師・親の三徳が骨子である、其の言葉は譬喩品に於てはつきり現はれる、「今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり 而も今此の處は諸の患難多し 唯我一人のみ能く救護を爲す」とある。其の文が即ち我が有と言はれるところに主人の徳を現はし、我が子と言はれるところに親の徳を現はし、救ひ護るといふところに師匠の徳が現はれて居る。これが三徳の兼備の文と稱せられて居る。併し此の譬喩品の一所ぢやない、法華經は前後皆さういふ意味が現はれて居るので、能く法華經を研究して見れば壽量品と雖も勿論さうである。それで此の三つの中に一つを取る時には、主人・師匠・親といふ中の親の一つを取る。日本の天子様に就て言うても、義は君臣なれども情は父子の如しと言つて、親子といふ方が温かくて宜いのである。だからして天子様は君と申すよりも親と申す方が宜しいといふことになつて居るが、其の通りで、三徳の揃つて居る方でも、主人・師匠・親といふ中には、親として考へるのが宜いから、壽量品では親として現はされて居る。「我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり」と現はれて居るのである。それは擴げれば主・師・親の三徳、纏のれば父としての徳を現はされたものであるが、法華經全體を通じてやはり三徳を光顯したといふことになるのである。そこで開目鈔の根本精神がそこに在り、法華經がさうである。往

いては一切の儒・外・内の三道、皆それに歸着するといふ程、大事の主・師・親の三徳といふことに就て之を能く了解し、それに關する信仰意識を明瞭にして置きたいと思ふのであります。佛教では主・師・親の三徳といふことは、相對的に言ふ場合と、絶對的に言ふ場合の二つを考へなければならぬ。

相對的に言ふ場合は、主人と申すのは國家に就ての主即ち國王である、日本で言へば天子様を申すのであります。親といふのは家庭に於ける所の父母を言ふのである。師匠といふのが、これが佛様を指すことになるのである。それを相對的に區域を家庭に取れば父母が親で、國家に取れば天子様が主人である。それから教といふことを廣く考へれば佛様である。狭く考へれば學校の先生でも、琴の先生でも、花の先生でも、皆それが師匠である。其の相對的の主人なり、親なり、師匠なり、の恩と、絶對的の主・師・親の恩とを研究する必要があるのである。

それが混線して加藤弘之氏などが、佛をさう有難く思へば天子様が粗末になるとか、親が粗末になるとか、いふやうなことを言つて居るが、さういふことを言ふならば、宗教といふものは悉く奉戴するところが出来ないものであつて、加藤さんの言ふやうな頭は非常に悪いことである。如何なる場合に於ても天子様が一番有難いといふことを言はなければならぬといふことを考へて、永遠の生命・無限の生命・絶對の宇宙といふことに這入つて行つても、天子様といふことを以て押切るといふならば、それは非常

な思想の誤謬混線を來して、まるで一切の思想といふものが爲に秩序を失つて行つてしまふ。さういふ思想が日本にあるならば、其の反動が起つて日本の國家は倒されてしまふものである。道徳でも哲學でも、宗教でも、さういふことは許し得ないのである。國家の範圍に於て天子様が絶對であるのである。吾々の滅びない永遠の生命、此の廣大なる地球を離れた大宇宙に取つては天子様の關係は無いのである。星の世界や月の世界に於て天子様がどういふ關係を持つといふことは解釋しない。それ所ぢやない、地球でさへも英國は英國、亞米利加は亞米利加である、日本といふ國家の範圍に於て天子様を絶對として考へるのである。之をお互が無暗に地球の全體、宇宙の全體に何んでも彼でも天子様を持つて行つて、佛様よりも神様よりもえらいといふ所へ思想を持ち行かうとする人は、非常な心得違ひであります。さういふ思想が日本の神道家といふやうな人には段々あるのであります。

さういふ思想は曾て外國に於てもあつた、即ち露西亞の皇帝が、一方宗教の方に於て神父と稱してやはり神様に代つて居る、國家から言へば皇帝であるけれども、宗教の方では俺は神の名代であると盛に言つた爲に随分害毒が起つたのである。羅馬あたりが潰れる時分がやはりさうである。羅馬の皇帝は宗教の内部までも支配するやうなことを言つたから、遂に羅馬は滅びたのである。日本でも日本の天子様を有難く思ふからと言つて、キリスト教の神様よりも、佛様の佛様よりもあらゆる神様よりも天子様がえらいと言つて教へたならば、遂に思想の甚しき混亂を來して、日本の國家が覆へさるゝ時が來

ると思ふので、此のくらゐ危険なことはないのであるけれども、加藤弘之氏の如きも宗教の絶対界にまで這入つて来てさういふことを言つたので、小學校などでも小さい子供に先生が「あなたは佛様と天子様とどつちが有難いと思ふか」といふやうなことを聽いて、佛様がえらいと言つたならば駄目だと學校の先生が言ふ、此のくらゐ馬鹿なことではない。そんな馬鹿なことをやつたのが茲で現はれて来て、日本思想が動亂に陥つたのである。

それであるから主・師・親の問題は相對的と、絶對的といふことを最初に考へて置かなければならぬ。佛教では無論相對的に説かれて居るのであつて、日蓮聖人のなされたことから言へば、日蓮聖人は御自分の親に對しても非常な孝心な方であつて、母御が俄に御隠れになつた時分には、其の蘇生を祈られた其の熱心の爲に悲母は蘇へられた。此の位親孝心はない、死んで居る親を生き返らせる、即ち親を思ふ至誠天地を動かすものである、それ以上親孝心といふものはない。又此の外に日蓮聖人が信者に對して親孝心を教へられたことは到る所に現はれて居る、「空飛ぶ鳥の子を養ひ地を走る獸の子にせめらるゝを見ては魂も消えぬべく覺え候」と仰せられて居る。雀が子を養うて居るのを見、犬が子を養うて居るの御覽になつて、あゝいふ畜生でさへも親が子を可愛がる心は實に感じ入ることである、人間の親が子供を育て上げる時分の親切、此のことは實に涙の外はないといふことを書かれて居る。相對的に親の恩といふことは、日蓮聖人は最も能く教へて居られる所のことである、それで満足しなければならぬ。

それを世間の教育者が間違つたことを教へる、佛様とお父さんどつちがえらいか、佛様がえらいといふと、親父が佛様と取つ組合をした時分には、親父の頭を殴るかと言つて、子供に愚な問題を提供する此の位馬鹿氣たものはない、物の範圍範圍を決めて、家庭に於ては父母を中心にしたる道德である、社會に於ては相互相倚り扶けるの道德である、國家に於ては皇室を中心にして忠節を捧げるの道德である、全宇宙に對しては宗教的の信念を以て、さうして其の絶對人格者に信仰を捧げて行くのであるといふことの範圍といふものは、少しも衝突するものでもなく、横ざるものでもないのである。其の範圍を考へずしてやるといふことは、算盤を入れるならば、桁を知らぬやうなものである。十錢も一圓も一萬圓も一つだといふので、何處へでも構はず入れて行く、一萬圓と言つても一錢の所へ入れ行く、そんな馬鹿なことはない。物の範圍、範圍、區域が非常に大事である、其範圍に於ても長といふものが澤山ある軍隊に於ては分隊長、中隊長、大隊長、聯隊長、旅團長、師團長、といふやうにあるけれども、師團長と、旅團長どつちが地位が上か、分隊長と大隊長どつちが地位が低いかといふことは軍隊では直ぐ分る、分らぬ者は馬鹿者だ。家庭に於て尊ぶべきもの、社會に於て尊ぶべきもの、國家に於て、宇宙に於て、さういふ尊ぶべきものが佛教に於ては最も能く示されて居る。

そこで國家の場合に於ては、日蓮聖人はあの通り勤王の志を立てられ、北條が勢力を得て、總て武門武士の人も、學者達も、皆が北條に頭を下げてしまつて居るのに、日蓮聖人は單身鎌倉街頭に立つて

北條は逆賊である、日本は天子様の國であるといふことを絶叫して、それが爲に迫害に遭うたけれども、屈せずして其の正義を貫いて、天皇の威徳を世に輝かざうとされた。其の志は段々續いて南朝の志士の頭に這入り、或は水戸の光圀卿の頭に這入りして、遂に明治維新の王政復古といふことが實現された。勤王の主張は日蓮聖人が最も其の根本の魁を爲したものである、楠公よりも、光圀卿よりも、明治維新の勤王の士よりも、其の最も前驅を爲したる所の者は日蓮聖人である。それは正直に歴史を研究して居る人は今日に於て皆言うて居るのである、是は歴史の上に極めて明瞭なことであります。唯日蓮聖人が坊さんであつた爲に、却て其人の徳を慕はないのであるけれども、あれが髪を生やして刀を帯して居つたらえらいものである、坊主が嫌いだといふ所から、日蓮聖人が坊主であるといふ所に引つ懸つて居るので、勤王家として廣く從來の史家に傳へられなかつたのであるが、日蓮聖人が當り前の人であるといふことであつたならば感歎措かざる所であらうと思ふ。

それから師匠といふことに就ても、相對的の場合には日蓮聖人は道善坊に對してあの通りである。道善坊から大したことを教はつた譯でもないでせうし、道善坊といふ人はえらい人でもないけれども、日蓮聖人は一日師匠としたといふので、報恩鈔をお書きになつて、さうして日蓮が命懸けで盡した功徳を御師匠様へ御回向申上げるから、花は根にかへり眞味は土に留まり、日蓮の功徳で師匠道善坊は救はれるに相違ない、此の功徳に依つて師匠が救はれないといふことではないといふことをお書きになつて居る

如何にも其の志といふものが鮮かに現はれて居るのである。

さういふ風に相對的に親なり、或は國王なり、或は師匠に對する所の主・師・親三徳に就ての報恩行動といふものは、働さといふものは、日蓮主義に於て頗る明瞭なことで、是亦吾々の學ばなければならぬ所である。唯日蓮宗は太鼓を叩いて病人相手にして居る、國の事をやるのは軍人のやることで、こつちは珠數を掛けて狐憑をなほすといふことを考へて居る人もあるけれども、それは間違つて居る。日蓮主義者が國民の師表となるべく、即ち親に對し、君に對し、師匠に對する三徳の恩義に感謝する行動を實現して、始めて日蓮主義者であり、法華經の實行者であると言へるのである。日蓮聖人が即ち其の手本を示されて居るのである、唯日蓮聖人が題目を唱へた所だけを眞似て、あとは學ばないで足れりといふやうなことを考へて居る人があるけれども、それは甚だ間違つた考方である。

世尊の比丘につけたまはく、

若し衆生ありて反復することを知らざれば、大恩すら尙ほ憶はず、
いかに況んや小恩をや、設ひ彼れ我に近づくと、我れ彼に近づかず、
たとひ僧衣を被て吾左右にあるも、此人猶ほ遠ざかるが如し、

一 智一阿含經一

日蓮宗概観 (其二)

故 梶 木 顯 正

第二章 日蓮聖人傳

以上述べる所は日蓮聖人出世以前及び以後出世當時の、鎌倉及び日本全土の佛教の大勢を略説したのであるが、これ等の状況を合せ考へて見るに、何うしても四圍の趨勢状況から推して、時代そのものが日蓮聖人のやうな人が出られなければならない状況になつてゐたと思ふ。

以上述べ來つたが如く、方に日蓮聖人の時代は、平安朝の腐敗佛教（即ち天台宗）と、之れを改革せんとして興つた新佛教（即ち禪宗、律宗）とがシノギを削つてゐた時であつた。（前者は京、奈良の佛教、後）この間

つて起つて居たことである。この偏見を正さんとし居られたことが一ツ、其の事は聖人が「諸宗の學者は近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の毒量品を知らず」云々と、仰せられて居るのが則ちそれである。

(二) 個人的獨善的に流れしめると云ふ事

人間といふ者は煩惱の凝りであつて愚痴暗昧、もの、道理の解らぬ者である故に、佛様の御慈悲に絶るより他に救はれる道は無い、と云ふ譯で、國民精神をして冥滅するやうな隱微に導びて、この世は穢土であるから、早く佛様の極樂へお引きとりを願ふ事が肝心だ、と教へた。其處で斯うした佛教徒は、皆争つて家を捨て世を捨て、山に這つて行ひますと云ふ獨善主義になつて來た。爲に現實とか國家とか云ふ様な觀念は薄らぐ耳ならず、此の未來觀、厭世觀がひいて悲觀退嬰の思想を生ましめるに至つたから、大聖人は憤然としてその有害を叫ばれて「極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず」と説破さ

に在つて精神を打ち込んで學ばれた日蓮聖人は、之れ等天台・真言・禪・律・淨土等の諸宗を縱横に解剖してその根柢を究め、五千七千餘卷の一大佛教を五度も閲讀されて、其の心髓根本を捉つて起られたのであるから、當時各宗の長老先徳が齒が立たなかつたのも無理はない。で少しく大聖人の意中を窺つて見るならば左に擧げる様な事柄が考へられると思ふ。先づ

(一) 各宗は佛教の心髓に迷ふて居る事

當時各宗の取つてゐた態度を見ると、第一其の宗としての依經が佛教思想の内容から見て正系をハツて居る事、言ひ換へれば分裂的局部的佛教觀を持れ、山間佛教をして街頭に引張り出されたばかりでなく、現實回避の佛教を、現實尊重の佛教と轉向せしめられたのである。

(三) 統一的佛教觀の發揮と佛院觀の誤謬を正す事

當時の諸宗は、佛教の傍系を握つて正當を得たりとして居るが故に、之れを正すべく、佛教の結論たる法華經から開顯統一の（開顯とは諸經の價值を排別し、て一とはその價值が區分されたものに一二三の順序をつけて其れを一本の中心根本の教義の繩で繋ぐこと則ち體系づける事）宗義を發揮して、各宗の歸着點を明かにされたのである。と同時に釋迦、彌陀二佛のツカイ分けをやつて居る諸宗に對して、法華本門の立場から信仰の順逆を正し、久遠絶對の主師親三徳を一身に體現し玉ふ教主であり且つ教主本佛を光顯し玉ふた。（その久章講話）を見られたい）

(四) 佛教の統一觀から出發して王道蓮道の順逆を正す事

一體日蓮聖人は佛法と王法（王法とは國）とは思想系統に於て全く同一如して居るのでなくてはなら

ない、と云ふのが、聖人の佛教觀である。國體は國體、宗教は宗教と別れ、一になつて居るのは眞の佛教でない、といふが聖人の佛教觀であるから、この御識見に反する宗教ならば、佛教であらうと、キリスト教であらうと断々乎として許容されないのである。然るに當時の佛教はその點が甚だ不明瞭であつたから、それを最も明快に法華經の見地から解決された。其れは「日本國始つて以來反逆者二十六人あり、その第一は源頼朝なり」云々と、代々の國民が天下様と拜んで居つた征夷大將軍を擧げて、之れに大鐵槌を加へ「北條義時は土民なり隱岐の法皇は天子なり」と、義憤の涙を振つて絶叫されたのである。(北條義時が三天皇を流し者にしたが如き大逆罪を犯したにも無かつたから、聖人は之れを呵責した志士が當時の國民の中に一人も叱咤されたのである) 聖人は佛教の中では絶対統一の一佛主義を絶叫し、國家の中では「天に二日無く國に二王無し」と聲も惜まず主張されたのである。寔にキリスト教の内村鑑三氏が「眞の日本國民とは日

としての權威を失ふ時である事を深く一覺悟すると共に肝に銘じて置かねばならぬのである。

(五) 外來の佛教を日本の佛教としなければならぬと云ふ事

當時の佛教は形ちの側からも、精神の方面からも共に支那朝鮮の外來そのまゝであつたから、之れは何んとしても日蓮聖人の堪へられない所であつたのである。だから聖人は「彼の國に善かりし法なればとて、この國にもよかるべしとは思ふ可からず」、又「國を知るべし、國に隨て人の心不定也。たとへば江南の橋の淮北に移されてからたちとなる、心なき草木すら所による、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん」と又「日本國は神國なり」と云はれ、「抑も日本國は如何なる教を習ふてか生死を離るべき國ぞ」と又「日本一洲は印度震旦には似ず」と諸宗上下の誤りを糾斷されて居るのである。故に識者は「我が日蓮宗は外來の宗教に非らずして、日本國

運聖人なり」と言つたが、國民中の眞の國民は日蓮聖人であり、日本に於ける佛弟子中の眞の佛弟子とは日蓮聖人であらう。聖人は北條の霸道を反逆者となりと断定されて居るので、この點は特に現代人は刮目して見なければならぬ重大な點である。七百年の昔に於て正されたこの大義名分は昭和拾年の今日、猶依然として國民の間に明瞭を欠いて居るのである。その尤も適例としては社會主義と稱する國民の一派は皇室の尊嚴性を解せずして、然かも之れに弓を引かんとする姿は明かにそれを語つて居るものである。國民は大聖人に對して一大懺悔をせねばならぬ時に再會して居るのではなからうか? 日本國家から我が國體を除外したならば、その時は日本國の建てられて居る意義を失つて世界の間に存つてもよし無くてもよい、と云ふことになる時であり馬賊海賊の建てた國と同一價値の國となる時であり我等國民の祖先の努力は水泡に歸する耳ならず國民

必然の宗教」なる事を忘れぬやうにして貫ひ度い。斯くして外國の佛教が日本の佛教へ、日本の佛教はやがて「分裂」から「統一」へと結論されなければならぬ状態に進みつゝあつた。と同時に一方國民は、大義名分の上にハッキリした規準を持つてゐなかつたから、當然一大偉人が出て、是等の重大なる問題に對して解決と結論とを與へなければならぬ時に遭遇して居たのである。然し宗教は「知る世界」ではなくて「信する」世界であるから、事はなかなか面倒であつたが、聖人は「日蓮佛勅を蒙りつて」と云ふ確信から、身命財を捧げ、猛然と起つて時代惡と戰はれたのである。而して聖人御一生の戰は前半は迷盲の打破(折伏)であり、後半は極意の發表建立(開顯)であつたのである。次に聖人の御傳記を大略述べんとするのであるが、便宜上大段二ツとし、佐渡御流罪を中心として其の前と後とに分けることとする。

(次續)

人生と法華經

(其五)

池ノ内三雄

懺悔篇 第一 六、半生の懺悔

私は今や赤裸々に且つ卒直に懺悔しやう。私連共産黨員の赤裸なる告白によつてこそ、世の教育者や、爲政者や、青年子女を持つ親連は、この國體の破壊者、家族制度の反逆者の發生防止の、正しき對策が考案せられるであらう。これ又参考とならば幸甚である。

社會では共産主義的活動等を發表することを制止し、常に隠閉せんとしてゐるやうである。かくては何時になりても、社會は改善されず、國家は進歩せず、犯罪を未前に防止し、過供を根本的に斷絶することは不可能であらう。幾度か一掃とか、壊滅とか、滅盡とかといふ言葉をもつて傳へられた共産黨が、全く妖怪の如く徘徊し、次から次へと發生して來るのは、皆共産主義の正體を、現代青年の前に正直に暴露し、批判させることを怖れてゐる當局の社會教育の一缺點ではな

からうか。この故に、私は共産主義者は如何なる條件の下に發生し易く、如何にして發展し、如何に活動したかを明らかにしやう。

私の傳へ聞くところの、日本に於ける現在の共産主義活動は、決して正統的なものとは思へない。勿論反動期と云はれる現情勢の下に於ける、かゝる形態は、早晚改めらるべきものであることは、活動しつゝある共産主義者等もよく承知してゐるであらう。たとひ命がけの活動をなすつゝあらうともそれは非法法の遊戯に過ぎない。それは非法法の爲めの非法法といふ奇型兒的共産黨となつてゐるからである。かゝる型態の下にあつては、プロバカートの跳梁の最もよき舞臺であるからである。又かゝる組織は理論の中庸を缺き、闘士間の暗闘の斷ゆることがない。したがつて黨は、それ自體の發展を阻止すること明らかである。この様な共産黨はたと社會に毒を流すのみにて、何等社會の發展に寄與しない。それは又、闘士の社會正義の觀念にも相反するものである。そこ

に共産黨チレンマがある。只青年の血氣は、眞剣な活動中は全體性に於ける反省の機會が與へられない。彼等の所謂自己批判は、たゞ社會運動の國內に極限されてゐる。一度檢舉せらるゝや、彼の反省は、その極限の國外に送り出る。彼の反省は全體的となり内觀的となつてくる。最近の轉向者の續出は、この奇型兒的共産黨の下に活動したる青年、特に學生によつて、大量的に生産されたが、この現象のみに依つて、共産主義の活動を輕薄者の所爲なりとなし、これを輕蔑し、資本家も、地主も、教育家も、宗敎家も、將又爲政者も、最近勃興せる、日本精神運動の餘波に乗托し、自己の利己的優越観を保持し、資本主義を謳歌し、富國強兵の美名にかくれ、飽くなき酷使をこれことゝし、或は又、これを看過し、それ自身の猛省がないならば、共産黨は又妖怪の如く、隨所に出現するであらう。

共産黨は、如何なる處に萌え、如何なる處に成長し、如何なる點に眼を注ぎ、如何なる方法によつて手を差しのべるか、私は自分の歩んだ経路を、共産主義信奉當時、かの統一公判廷に於て陳述したところの記憶を辿りつゝ、赤裸々のところを告白しやう。

◇ 私の經歷

私は一九〇四年、即ち明治三十七年五月、日本に於ける第一次××主義戦争の眞只中に、埼玉縣の水害地で有名な荒

川沿岸の一寒村に貧しい手工業者の末子として生れました。私の生れました當時は、戦争によつて、日本の資本主義は急速なる發展をなして居りました時代で、したがつて私の父も小企業家としてどうにか生活してゐたさうでありましたが、母は一家の主婦として、又一機織女工として過激な労働をして居つたさうであります。その爲めに母は、戦争による極度の過勞の爲め、母胎の内にあつた私は、早産兒として普通よりも早く、娑婆へおしだされたのであります。これが私の病弱な第一の原因であらうと思ひます。かくて私は生れ乍らに、××主義戦争に對して心から呪ふところの反對者として世に出たのであります。そして私が物心の付きはじめた頃、即ち明治の末期よりはじまつた戦後の經濟恐慌によつて、私の家は貧窮のどん底につきおとされ、父の少しばかりの所有地、財産といふものは殆んど、糸問屋、染料問屋等に奪はれてしまひました。そして私の一家は小作百姓の中へと加はつたのであります。

かうした中に育ち、小學校に通つてゐる中から、錫紙を取つて、働きました。しかし、いくら働いても、働いても折角大骨折つて取上げた米は、小作米として奪はれ、家にはほんの僅かしか残らない。反對に、肥料屋にはうんと借金かたままる。自分の家で食ふ爲めに残しておいた少しばかりの屑米まで賣拂つて、外米や、麥と交換して食べなければ

ば生活が出来ない程でありました。實際一反歩の田からの取り上げと、それに要する生産費と差し引くと、年がら年中働いて、それでちつともうからない。それどころか、詳しく計算すると、働けば働く程損がいくことに気がつきました。

これは昭和五年の帝國農會の調査であるが、一反當りの府縣平均全收量は、二石七斗六升三合で一反當りの總產物金高は五十三圓九錢です。これに要する全生産費は、七十七圓八十三錢であります。さうしますと、一石の生産費は二十六圓四十錢で昭和五年の期米十二月相場は十五圓八十四錢であります。さうすると、一石に對する損失が十圓五十六錢となる譯であります。一段歩を作ると、二十四圓七十四錢損するといふことになるのであります。若し農家が戸一町歩の田を耕作してゐるとすると、二百四十七圓四十錢の損失がある譯であります。これは自作の場合であつて、小作農にあつては一反歩の損失が實に、二十九圓二十七錢七厘といふ莫大なものになりますのであります。

一體これはどうしたことであらう。小學校の先生からは疎ぐに追ひ付く貧乏なしたので、農は國家の大本だ、農業は大事だ百姓にならなければいけない。それが、天皇陛下への御恩返しだと教へられた。その百姓がどうしてこんな損をする仕事なのだらう。損をして、借金をし餘え死にし

てまでも百姓となつて、國家の爲め、 $\times\times$ の爲めに、地主の爲めに、牛馬のやうに働く必要がどこにあらう。又 $\times\times$ のため、 \times の爲めだといつて、農家の働き盛りの者を引き出して、 $\times\times$ に追ひやり、國民の生命を奪ひ取る $\times\times$ や $\times\times$ に對して、私は深い深い疑問を持つやうになりました。

(一燈園や、貫川豊彦を訪れたのもこの頃である)

一九二四年一月、私は社會生活に對する不安と、いろいろの深い疑問を解決したい一心から、從來の貧農の奴隷的生活では到底この大きな疑問の解決をすることが出来ないことを考へ、農業労働よりは多少時間的にも經濟的にも有利な工場労働者にならうと上京いたし、市外池袋の \times 鐵工場に入りました。

この鐵工所は、引拔シャフトを作る工場で少數の熟練した鍛冶工が居ればあとは素人にも出来る爲めに、職工の大部分は、農民に近く、田舎に家庭を持つてゐて、農業に於ける損失を稼ぎ出すといふ至つて封建的な工場でした。その爲めに、近代的工場に於けるやうに職工の間に、激潮とした職闘の気分がありませんでした。したがつて、非常に待遇が悪く、賄付ではありましたが、一日十時間もコキ使はれて、たつた一圓でありました。職工の大部分は不衛生極まるバラツク建の寄宿舎で、まるで豚のやうな劣悪な食事と、汚い寝具の中に生活を強制されてゐました。寄宿

舎があり乍ら、浴場もなければ食堂らしい食堂もない。布圍はあつても何年前に作つたのか知れない油じみた布と綿のボロ裂にすぎません。私が工場に入つたのは丁度冬でありました。寄宿舎の冬は特に悲惨なものでありました。寄宿舎の屋根は梁の上にたゞトタン板をチカに一枚打付けただけでありました。工場賃すボロ布圍だけではとても夜は寝られませんでした。さうかといつて、安い賃金をもらつて田舎へ仕送りしなければならぬのでとても自分の金で布圍を買つたり、暖爐などを買つて置くなどといふことは出来ません。そこで私達は、夕方仕事が終わると、鐵の棒これは切れ端で工場に澤山あります。これを放射爐の中へ投げ込みこれを温めて、機械掃除に使ふボロ布に包んで抱いて寝る。それでもまだ寒い時は、五六尺もある鐵の棒を二本温めて、布圍の中へ入れてそれを體の兩脇に置いて寝るのです。それでも、雪の降る夜等は戸の破れ目や、よろひ窓から室内にサツ／＼と雪が舞ひ込んで仕方がないからこんどは、疊の空いてゐる所の上へ来て、それを布圍の上に乗せてそれでその中へもぐり込むのであります。

一日中搾取されつくして、グタ／＼に疲れ切つた體がどうしてこれで休まれやう。だが私達は一日だつて休むことは出来ない。休めば一日五十錢といふ賄料を差引かれるのであります。

それなのに一方ではブルジョア共は、やれ避寒だ、やれ温泉だとなかして遊び暮し、煙のたふさないやうに電氣ストーヴや、スチームでムシムシしてゐる部屋の中で寝そべつてゐるのではありませんか。私達が冷たい部屋の中で、鐵の棒を抱いて寝る代りに彼等は、私達を搾取した金でニャラ／＼した妾や、賣笑婦どもを相手に寝るのであります。又夏になると、汗と背がニチャ／＼して氣持が悪くてたまらない。さりとて、毎日銭湯に行くのではやり切れぬといふので私達は、マシン油の空カンを利用して、これを桶の代りにし、これに水を入れ、例によつて、放射爐で鐵の棒を眞赤に焼いて、それを水の中へブチブチツと入れて湯を作り、それで行水をやります。

夜は例のトタン板のカン／＼に焼けた中で寝なければならず、やつと寝就ける曉方になると、今度は屋根裏からボタ／＼と雪が顔や布圍の上へ落ちて来るといふ次第です。その位だから、工場設備も至つて悪く、手の指をもぎ取られたり、顔や胸に鐵の棒がはね付いたりして、職工はよく大怪我をいたしました。それでもろくに手當も呉れず田舎へ歸したり、歸して首にしたりしました。首にされたつて、勿論一錢の解雇手當を呉れるのではありません。この様な監獄部屋同然の工場が、宮城を離るゝこと僅かに二里の池袋にあるのであります。だからこの様に悲惨

な労働者の生活は、單に私の工場ばかりではありません。日本の全工場労働者の約一刻を占めてゐる紡績工場や、モスリン工場や、製糸工場その他一般小工場の寄宿舎の大部分はこの様な悲惨な状態に置かれてゐることは、今迄に多くの人々によつて幾度か詳しく述べられてゐるところであるから、私は述べませんが、私は工場に入つて見て、そのあまりにもひどいのに驚きました。いくら何でもあんまりだ。もう少し人間並の扱ひをしてほしいといろ／＼事務所に話してみたのでありますが、頑迷な資本家は「皆の者が今までだまつて寝起きして来たのだからいゝぢやないか。こゝがいやなら何處へでも行つて働いたらいいぢやないか」と實に不誠意極まるものでした。しかしどう考へてもこんな生活が人間の生活だとは思はれません。職工達は、皆蔭ではお互ひにブツ／＼不平を言つてゐるが、掛合つてもだめだと諦めてゐたのです。私は結局、一人一人で資本家におつかつても何にもなまはしない。これはどうしても職工がみんなで團結して闘ふより外には方法がないと考へる様になりました。これが労働組合に加入の動機であります。

◇ 労働組合活動

私は一九二四年四月、今では社會ファウジストとして有名な赤松克麿を校長とする、日本労働學校城北分校が日暮

里に開かれたので、其處へ入學いたしました。そこで私は社會に對するいろ／＼の疑問の解決の端緒を得たのであります。そこで悲惨な農民の爲めに闘つてやりたいといふ義憤的觀念から、日本農民組合に加入いたしました。しかし工場に労働してゐた爲めに、その後約一ヶ月間は、總同盟の城北労働聯合會に關係いたし、總同盟の指導下に居ました。

當時總同盟は、第一次共產黨事件、並に、震災當時に於ける南條労働會の同志川合等を××した白色テロルにちみ上つた、鈴木、赤松一派の官僚的日和見主義へ急速に落轉する偉と、これに對立して激烈なる現實の闘争の中にあつて、常にプロレタリアート解放の爲めに、大衆を組織し結合し、吾々の決定的勝利の爲めに闘争せんとする革命的指導者、渡政、杉浦等を先頭とする、東部合同、關東職工、關東印刷時計工等の諸労働組合がありました。この對立闘争は、すでに代表陳述に於て、市川、杉浦並びに他の同志によつて述べられた通りであります。その露骨な現れは一九二四年秋、かの總同盟、關東同盟會の内紛に始まり、遂に、革命的四組合の除名となり、更に、總同盟一九二五年度全國大會の直後、總同盟のダラ幹どもは、何等の理由なく、否、資本家のオコボレにあづかることが出来なくなつたが故に「共產黨の陰謀」といふ最も憎むべきデマをもつ

て、關東、關西に於ける革命的指導者を除名したのであります。當時私は城北労働聯合會巢鴨支部に屬し、こゝの組合員と共に、労働運動を擾亂する裏切的官僚幹部を排撃すべく、城北労働聯合會の理事會に、その頃丁度議會上程されんとして、日本の革命的プロレタリアートの中に、就中日本共産黨指導の下に嵐の如く捲起つてゐた無産階級の××法、治安維持法の大反對運動、並びに、官僚幹部に蹂躪されたる日本労働總同盟の内部腐清運動等を積極的に捲き起して、この全國的運動に参加すべきことを提議したのであります。然るに城北労働の内部にあつて、労働組合を獨占し、常に赤松克麿や齋藤健一等の、關東同盟の官僚的ダラ幹部と通謀し、その毒薬に浸潤したる所の、城北労働のダラ幹、岩田善作等は、我々の正當なる要求の前に戰慄して、無法にも、多數の幽霊理事を利用して遂に、十二對七の差を作つて、治安維持法××の爲に、資本家、地主共と協力し、ダラ幹擁護の爲めに、總同盟腐清運動を壓殺したのであります。我々城北労働の組合員二百名中の三分の二は、驟然として、何等組合員の意志の反映せざる城北労働聯合會に屬するの不當なるを思ひ、労働階級の正しき指導を確保する爲め、城北労働より脱退し、東京西部労働組合を組織いたしました。同時に、吾々は労働組合組織の充實を計り後、組合戦線を統一する爲めに、東京合同労働

組合と合同し、吾が左翼労働組合、日本労働組合、日本労働組合評議會の確固たる基礎を作るべく闘争し、こゝに労働者として、必然に日本共産黨の政策を支持するやうになりました。

東京合同労働組合加盟の後には、同志渡政、同志唐澤等の革命的指導の下に、共産主義者の訓練を受け、工場内の組織活動をやる傍ら、川崎富士紡争議の應援、田端の西川モスリン工場の組織、練馬の東洋モスの組織等に協力し、紡績労働者の悲惨な實情を調査し、日本飛行機自動車タイヤの組織、村松時計工場の争議等の闘争経験は必然に自らの階級意識を鮮明にし、プロレタリアートの歴史的使命を意識し、これの遂行を決意するに至りました。

一九二六年十一月、私が押取されてゐた鐵工所にも、遂に、闘争を捲き起す機會は與へられました。だが私は只今この争議の様様を詳しく述べてゐる暇がありませんから抄略いたしますが、その原因は、關東大震災後の變則的好景氣の反動として起つた工場閉鎖でありました。私達は直ちに工場を引き上げ、東京合同労働組合北部支部の事務所を争議本部にして、約二ヶ月間、東京合同労働組合の革命的指導の下に、争議は續けられました。結果は多くの要求を獲得したが、私達の闘争力におびえた資本家は、多數の戰闘的分子を街頭に投げ出したのであります。私もその中

の一人でありました。その後私共東京合同労働組合の常任執行委員に擧げられ、常に日本共産黨及び革命的労働組合評議會指導の下に、同志川合等の血を以て彩られた東京合同労働組合の革命的傳統を繼承し、労働者の利益の爲めに戦ひました。



佛の言はく、
兩舌を離れ、破壊の心無く、鬭諍
離散せる人を和合せしめ、又悪
口を離れよ。麁獷苦惡の言語は、
自らを壞りて 他をも壞るを知り
て之を離れよ。

— 華嚴經 —

節 分 の 夕

磯 部 滿 事

春に入れば、昔しは梅見月と稱して隨所に杖を曳く茶人あり、或は梅の四貴を揚げて、稀なるを貴びて繁きを貴ばず、老たるを貴びて嫩きを貴ばず、瘦たるを貴びて肥たるを貴ばず、蒼を貴びて開きたるを貴ばず等の文人も見へたが、今は陽曆に従へば、春とは名のみ、且つ自然を歎美するやうなのんびりした氣分の人が尠くなり、スピード時代だとか、華より團子といふ傾向であるが、併し又一面には故事慣習に執はれて、名士の年男も見聞する。全く世の中は面白いものである、所謂それが諸法の實相なんですよ。

さて二月四日節分、明日から立春といふその午後よりチラホラ降り出した雪が、三時四時となつて益

益猛烈な吹雪となり五時頃には早くも五六寸と積り一面白雪皚々實に見事である、帝都淨化である。全国的に本年は降雪多量で、先頃迄鐵道省も排雪に悩んでゐた。雪は豊年の瑞兆ともいふが、それも度を過すと却て人々は第一交通不便となり、食料欠乏となつて生活を脅かされる。過たるは及ばざるにしかずである歟。

何はさておき、私はこの日午後七時から駒込の友達の家を訪ねる約束がある、そこには先頃早逝された彼の愛弟の第二七日忌速夜にも相當するのでせめて心ばかりの御回向も捧げたいし、又若干の談義もがなど志して六時半頃會館を出たが、市電は早くから不通となつてゐるので、不得已圓タクを拾ふ

べく江戸川の方へと向つたが、「仲町の坂は危険だからご免下さい」と先方から断られて思ひ切りもよい。かうなれば仕方ない、窮すれば通ず、不圖省線の利用を思ひ付き、漸く目白驛に辿り着いた。そこは押すな〜の大雑沓、壽司詰のやうにされたが駒込驛迄運んで戴けたことは有難い、モーベめたもの、こゝからは僅か數丁ばかりである。降り積つた清浄な何の足跡もない染井の通りを、子供のやうに面白半分、粉々たる飛雪をあびつゝ長靴を運ばせた。

この邊右側は商店で未だ明るい、左側は大きな門構の家ばかり、皆堅く入口の大門を閉して交通遮断、犬の子一匹も見當らない。風の具合でモー一尺ばかりも練堀に添つて積つてゐる中を、グサリ〜と歩くのは又一種の快感を伴ふものである。寒いといふよりも物珍らしい好奇心にかられて凍る手に傘を吹きばされぬやう固く握りしめ、お題目を唱へつつ歩いてゐる間に早や目ざす友の家の前に来た、それがいつもより近い気がした、何と人は勝手なものである。

有難う存じます

と、愛兒を喪はれたお母さんから感謝されて却て恐縮するばかり……。「約束と申すことは違へぬ事にて候ぞ」と日蓮聖人は仰せられてゐる、自分の身勝手で違約するやうなことは永久に心の疵となる、それこそお互とても堪え難い苦惱である、少し位この肉體上の苦難に遭つても、心の悦び、精神の晴々しいのが何よりも愉快である。

十時前、又復停電となつた、今度は相當長時間に亘るらしいので、こんな晩はいつもより早く辭去するがよからうと腰をあげると、友達は「乗物もあるまいから泊つては」と親切に引留められたけれ共、これも修行の一つだからとシツカリ武裝して十時十分頃に失敬した。門を出るや否グザリツとばかり長靴は雪の中に埋もれてしまつた、オヤ〜とそれから街路の中央を辿つた。来る時は辛じて翳せた傘も歸りには風が一層強く、とても聞く譯にも參らぬ、絶えずピカ〜と空に青い電光のひらめくそれと、雪の明りを便りに漸く駒込の省線驛へと着いた。

見ると有難いことには大門を開放されて、道路から玄關まで綺麗に雪掃除をしてゐる仕事師があつた實に何ともいへぬ崇敬の念にうたれた。嗚呼拂へど拂へどあとから直ぐ積むこの烈しい吹雪を、何の爲め此所一軒ばかりが今頃こんなに大雪を跳ね除けられてゐるのか、既に一尺近い、それも降りしきるこの大雪を數十間に亘つてかきのけることは容易ならぬ努力である、これこそ無駄骨を折るやうなもの、求むる心あつてはとも出来る仕事ではない。さう思ひつゝ振り返つて見なほすと、彼の印絆纏から御光がさしてゐるやうな気がした、思はず合掌した、そして一遍のお題目が自然と出た。こゝに来る迄の苦難も忽ち何處かヘサラリツと消え去つて、嬉しくてたまらずニコ〜で案内された。

腰をおろして間もなく停電で眞暗闇、併し數分の後には再び明るくなつた。
 「こんなお天気ですから、先程電話でお出で下さるには及びませぬと申上げたのですが、既にお出ましの後で、座御難儀でございましたでしょう、

其所には數名の人が、眞暗の中を僅か一二本の蠟燭で無言のまゝ、睨みくらをして居る、全く一種凄惨な雰圍氣が漂されてゐた。アノ十餘年前の大震災當時を追憶する。

「電車は未だ参りませうか」
 「来るには來ませうが、時間の程は解りませぬ」
 「それでは大塚驛を下さい」

構内のプラットホームには石油ランプが一つ淋しさうに風かげに置かれてゐた、向ふの驛員室の陰に黒い影が二つ三つ。ホームには勿論屋根はあつても横降りの強く吹き込む粉雪はベンチも悉く眞白である。思はず洋傘の尖端でストラ〜とこの長椅子に首題一遍を書いて暫らく瞑目して心に念じた。ヒョット眼をあげた時は不思議のやうに有難い電燈の光が雪にチラつく。而して程なく音も立てずに眞白に厚化粧した二輛續きの電車が入つて來た。飛び立つ思ひで乗込んだ、直ぐ出るか、モー出るかと約二十分も待たされてヤットコサ大塚に向つた。ヤレ〜、これでマア一安心、大塚からは二十丁足らずだらうから、モー歸つたも同然と聊か安堵の態。車中には

チラホラそれは男子ばかりでなく、バスの女車掌らしいのが二三人喋々嘯々とおしやべりしてゐる。やがて靜かに巢鴨驛にすべり込んだ、いつものやうに直ぐ發車せない、矢張りこゝでも一休みかと思つてゐると、五六分待つた頃「モーこれから先には參ることが出来なくなりました、まだ先に行かれるお方で、此所に下車されるお方は改札口で賃金の割戻を致しますから」と意外の宣言に、一同は互に顔を見合せる、併しどうもこれは抗議も申込めない、喧嘩にもならぬ、泣き出しさうな顔もあつたが、仕方ない。さて何時迄も車中に居残りもされまい、勇氣を鼓舞して潔く街路へと飛び出した、出るには出たものゝ外はイヤが上にも益々ウナリを帯びてサーツナと猛吹雪、顔も襟首もあつたものでない、白魔が我もの顔に跳梁を逞ふしてゐる。何處の商店でも今晩は早仕舞ひ、雨戸を堅く鎖して靜まりかへつてゐる、其の家根の看板も、軒並の目印らしいものも皆眞白に化粧して、何が何だかサツパリ見當もつかない。時々オーバーの裾からドゥツと吹き上げて來る雪に息もつまりさう、これでは一層のこと引返し

て車中に朝迄待ち明さうかどの弱音も出る、が併し文永の昔、佐渡の雪中に恩師を訪つた日朗師のことを想到して勇氣百倍、これしきにと唱題の聲も一段と高く、鶴籠町の方へと雪達摩のやうになつて歩みつゞけた。若しこれが人家のない野原であれば必ず行斃れが出来るのではあるまいかと思はれた。流石は大都市である、自分の前方に一人仲間がある、誠に力強く感ずる、今頃何處迄歸るのだらうか等と思ひつゞグサリ／＼と新しく降り積る尺半ばかりの雪中をお題目に合せて重い足を運んだ。かうなれば寒い凍えるよりは却て全身汗ばんで最早や他事一切念頭にない、エンヤラ／＼と龜のやうな歩を續けて二三町も來た時、何處からか一台の圓タクが現はれた。前に行く人と一言二言話して居たが、不調と見へたので、すかさず自分は太塚仲町邊迄行かないかと談判したが、平素の十割増程の要求であつたが、かうなつては金銭問題ではない、渡りに舟である、大白牛車である。早速乗ると同時に、前の人にも同車を勧め、車中で聞くと新宿の方へ歸るとのこと、遂にこの車で送ることになつた。お陰で私は十二時

前に無事歸館出來た、ホントに有難くて堪らない。

初め友達が引留められた時にも歸りたく思ひ、又省線電車の車中にも夜を明さず、息づまる思ひしても自分の棲家に歸らうとするのは何故なんでしょう。狭くとも、汚くとも、自分の住宅は何となくのんびりと落付く、他の場所はいかに綺麗であつても到れり盡せりでも永久に其所には居れない、早晚追ひ出される。今これを私共の信仰の上に移すと、現實の世界、そこには生、老、病、死、憂悲苦惱、衆苦充滿の忍土である、所謂客車と其内容である。お互はいつ迄も其所に止まることは出来ない、宜しくこの電車から、其重疊波瀾の風雪を踏破して本覺の棲家たるべき自宅に復へるべきである。それには相當の苦修練行を要する、即ち猛吹雪中の徒歩たる歴劫修行であるが、果してよく斃れずに歸れるだらうか幸にも救ひの車たる一佛乘に都合よくつかざる時に女でも、子供でも易々として憶がれの我が棲家に歸着することが出来るといふものである。以て乗物の大切なことが窺ひ知られるであらう。傳教大師の秀

句に「能化の龍女も歴劫の行なく、所化の衆生も歴劫の行無し、能化・所化俱に歴劫なし、妙法經力即身成佛す」といはれ、日蓮聖人は「靈山會上にして即身成佛せし龍女は、小乘經には五障の雲厚く三從のきづな強しと嫌はれ、四十餘年の諸大乘經には或は歴劫修行にたへずと捨てられ、或は初發心の時便ち正覺を成すの言も有名無實なりしかば、女人成佛をも許さざりしに、設ひ人間・天上の女人なりとも、成佛の道には望み無かりしに、龍畜下賤の身として女人と生れ、年末だ高からず僅かに八歳なり、旁思ひ寄らざりしに、文殊の教化によつて海中にして法師・提婆の中間、僅かに寶塔品を説かれし時刻に、佛に成りたりし事は有難き事なり、一代超過の法華經の御力にあらずば、争でか、斯くは候べき、されば、妙樂は行淺く功深く以て經力を顯はすとこそ書かせ給ふ」云云。今度私はかゝる目に遭遇して、彌彌法華經の信心もまざるべく、感激に堪へない次第であります。

更に驚嘆すべき事柄が、横濱の同信連中にあつた

それは別項、横濱教誌にもある通り一月六日の寒の入りから二月四日迄三十日間每晚寒修行會が、同信家庭間に營まれて、この最後の晩は神奈川二本榎の金子家に相當したのであつた。然るに生憎の大吹雪で次第に交通は杜絶する、けれども折角今迄一晩も飲かさず參加された人々はこの最終日に當つて、雪の爲め挫折したとあつては恥である。齋然として、婦人の身でありながら、而も遠い磯子から大内、高橋の二夫人と、中區の高田氏や、更に舊市外の笹下から齋田氏が最年少者であり乍ら求道の淨心強く參加されたさうである。此等の人々は遅く九時十時のアノ猛烈な吹雪の中をば無事に各自の住家に歸着されたのも、決して只事ではあるまいと思ふ。そして今から常時を懐想される時に、幾多の貴い體驗を得られたことを歎ばるゝであらう。願くはその強信の人々よ、猶又かゝる人を仲間とする法悦協會の同志等よ、益々健在にして最終の美を結ばれんことを禱りつゝ筆を擱く。

南無妙法蓮華經

法華經講話

(第二十七講)

小林一郎

妙法蓮華經方便品第二 (其十一)

今まで、方便品の偈の中で、過去に出られた佛もまた未來の世の中に出られる佛も、現在の佛も其の教を説かれる御精神といふものは一つである。即ち一切の人間をだん／＼と教へ導いて、佛様御自身と少しも異はないやうな者にしてやりたいといふ大慈悲心を以て教を説かれたのだといふ所を一通り讀みました。それからお釋迦様御自身が、やはりその精神を以て世の中に立つて教を説かれたといふ所へ入つて来て、お釋迦様の方では、一切の人間を皆佛にしてやらうといふお考へであるけれども、教を受けてる方の人間には、馬鹿な者もあれば、智慧分別の甚

念告
先般本會柴田理事長辭任に付理事會の決議に依り事務所を左記の通り臨時移轉仕候間御諒承被下度此際爲法國一層御清援奉願上候

- 一、舊事務所 神田區一橋通中央佛教會館内
- 一、新事務所 小石川區音羽町 教發行所内

知法思國會

だ不足な者もあるものですから、さういふ者に對して、初めから佛の自ら信ぜられる通りのことを言つても理解が出来ないだらうといふので、お心の底に一切の人間を佛にしてやりたいといふことを片時も忘れぬけれども、言葉に表はれた所ではさういふ事を打明けられないで、極く簡単な初歩の所から教を説かれた場合が随分あるといふことを、これから細かく説いて行かれるのであります。

我始め道場に坐し 樹を觀じ亦經行して
三七日の中に於て 是の如き事を思惟しき
(我始坐道場 觀樹亦經行 於三七日中 思惟如是事)

お釋迦様は初めは國王の子とお生れになつて、そ

れから修行の爲に王様の御殿を出て、諸國を廻つて、いろ／＼な學者の教を聞いて見たけれども、誰の言ふことを聞いても自分の心に本當に納得の行くやうな説が無かつたので、斯ういふ人生の一大事を決定するには、人の話を聞いただけではいけない。自分が深く考へて見て、初めて解ることであるといふことに決心されて、それから六年の間自分で一人静かに考へた結果覺りを開かれたのであります。それが佛陀伽耶といふ所でありました。「道場に坐し」とありますのは、その佛陀伽耶の道場のことであります。

これは今でもその古蹟が遺つて居ります。私も印度を少し歩いた時に行つて見ました。尼連禪河といふ川がありまして、隔田川よりモウ少し廣い。あの倍に近いから廣い川です。停車場の方から行くと、その川の手前の所が佛陀伽耶です。その川の向ふ側の方に山があります。山といつてもそんなに大

きい山ではありませぬが、小山が三つ四つあつて、如何にも風土の良い所で、草も木も蒼々として居るし、川の水も静かに流れて居る。成程斯ういふ所で修行したならば覺りが開けるかなと思はれるやうな所でありました。そこへお釋迦様が落着かれて、前後六年の間一人で修行された。さうして三十五歳の十二月八日に、愈々人生の問題を決定されたといふやうに傳へられて居ります。その場所を「道場」と言ふのであります。

この尼連禪河の近くに修行して居られた六年の間は、乞食の生活でありました。一體お釋迦様は國王のお子様でありますから、出家をして方々の學者の所を訪ねて教を聞いて歩かれた間でも、父の王様から御家臣を五人附けて置かれたし、食べる物や何かも少しも不自由の無いやうに始終仕送りをして居られたのです。だから出家といつても初めは樂なものでありました。御家臣が五人あつて、食糧が附い

て居れば、こんな暢氣な出家はない。ところが尼連禪河の側に落着かれてから、これはいけないとお考へになつたのであります。今日でも吾々はその事考へなければいけないと思ひますが、人間自分で生きて行かれない者は、本當に物を確り考へることは出来ないものです。少し亂暴な事を言ふやうですけども、是れは本當のことで、自分で生きたらぬ人、人のお蔭で暢氣に生きて居るやうな人は、苦しむといつても本當に苦しいのではない、思ひ詰めたといつても多寡が知れて居る。自分で生きたる人が本當に人生の問題を考へるのです。此の事は動きの無いことです。親に仕送りされて懐手でもしてブラブラして居つて、俺は人生の問題を考へたナンと言つても、それは目的になりはしない、多寡の知れたものです。その事をお釋迦様も考へになつたらしい。それで愈々これから本當の修行をするのだ、人生の問題を眞面目に考へるのだから、親に仕送りされて

樂に暮して居るといふやうな、そんな事ではいかぬといふことを思ひ定められたらしい。これは小さい事のやうですけれども、實はなか／＼大きい問題であります。それでこの尼連禪河の側に庵を結ばれて後は、親の仕送りをお断りになりまして、モウ一切何も受取らないといふことになつた。それで御自分には乞食の生活をして六年も過されたのであります。この乞食の生活といふのは、釋尊が覺りをお開きになりましてから後約五十年の間八十で御入滅になるまでの間も續けられたものです。お釋迦様のお弟子達は、皆釋尊に導かれて乞食の生活を致したものであります。

それは何故さういふ事をされたかといふと、それに二つの意味がある。一つは人の努力を尊重するといふ氣分です、これは大事なことであります。米一粒でも汗を流して作ったものである。一尺の布でも一生懸命で織上げたものである。さういふ人が骨折

つて拵へた物を軽々しく貰ふといふことは、人の努力を重んじないことだからいけない。佛教の修行をする者は、自分で耕さずして食ひ、自分で織らずして着るのでありますから、せめてはその品物を拵へたり、供給したりする人に對して感謝の心持を表はして、食ふ物や着る物を受けたい。斯ういふ心持から、坐つて居て人の持つて來るのを受取るのではなく自分から出掛けて行つて人の門に立つて乞ふといふこれはつまり貰ふ物を尊重する心持です。貰ふ物を尊重するといふのは、物を尊重するのではない、その物を造る人の努力を尊重する心持です。これはモウ謙でも斯ういふ心持でなければならぬ。後の世になりますといふとさういふ心持が缺けてしまつてなんでも坐つて居つてお布施を持つて來させて、それが少いと叱言を言ふといふやうなことになつてはモウお終ひであります。初めは斯ういふやうな殊勝な心持から、自ら進んで、人の門に立つて乞ふとい

ふ大きな樹があります。その菩提樹の下に靜かに座を占めて、今まで六年間に考へた事をスツカリ纏めて考へられた。さうして十二月八日に愈々その結論に到達された。即ち人生といふものは斯ういふものだといふことを、確りと思ひ定められたのであります。

人間が覺を開くといふことは無論あることです。「ア、これだナ」と思ひ當るといふ事は誰にもあることでありますが、併し覺りを開くといふには、固より覺るだけの準備がなければならぬ。ヒョツと坐つて考へてすぐ覺りを開くといふやうなことは有り得ないことである。吾々のは所謂漸修頓悟でなければならぬ。だん／＼に修行を積んで行つて、結局「ハア此處だナ」といふ所によつかるのであります。特別に機根の良い人は頓修頓悟で、ヒョツと修行し

ふ心持であつた。それが乞食の生活であります。それからモウ一つは自分を鍛鍊するといふことであります。坐つて居つて樂に考へたのでは、本當の覺りを開くといふやうなことは出來ないからして、吾が身心を鍛鍊する上から言つても、毎日戸外に立つて人の憐れみを乞うて人に物を貰ふといふ位な、切詰めた生活をして居ながら、自分を鍛へ上げて行かうといふ考へもあつたやうであります。兎にも角にも釋尊の御一生は乞食の生活であつた。

さうして凡そ六年の間、さういふやうな乞食の生活を續けられまして、愈々永い間考へた事も纏つて來たやうに思はれたので、それから尼連禪河を渡つて此方の岸へ來られた。この河は随分廣い河でありますけれども、所々に淺瀬がありまして、今でも膝の上ぐらゐまで濡れるつもりならザブ／＼歩いて渡れるのです。昔もさうだつたでせう。そこでこの河を渡つて此方の岸に來られた。そこに菩提樹とい

うけれども、それをすべての人に望むといふことは出來ない。普通の人間は漸修頓悟で、だん／＼修行を重ねて行つて、結局「ハア此處だナ」といふことが促まるのでありませう。お釋迦様の場合などもだん／＼修行をお重ねになつて、六年の修行の結果佛陀伽耶で覺りを開かれたのであります。

その事を茲に言はれて居ります。「我始め道場に坐し」即ち河を渡つて此方の岸に來られて、樹の下に坐つてさうして瞑想された。「樹を觀じ」といふのは今の菩提樹のことです。「經行して」といふのは、そこを歩きながら靜かに考へる。いくら修行するからといつて、二十時間も三十時間も坐り詰めに坐る譯には行きませぬから、坐つて考へ、又立つて樹の下や、川の側などを靜かに歩きながら考へる、これが經行です。さういふやうに致して大悟されてから、三七日、即ち二十一日ばかりの間、いろ／＼此の教を世に弘めることに就て工夫して、さ

うして結局是の如き事を考へた。それは次のやうな
ことです。

我が所得の智慧は 微妙にして最も第一なり
衆生の諸根鏡にして 樂に著し癡に盲ひたり
斯の如きの等類 云何がして度す可きと

(我所得智慧 微妙最第一 衆生諸根鏡 著樂癡所
盲 如斯之等類 云何而可度)

自分の得たところの覺りといふものは、永い間苦
心をした結果であるから、非常に奥深いもので、何
人も及ぶことの出来ないやうな絶對の眞理である。
モウこれより以上は無といふ所を覺つたのだ。と
ころが此の自分の覺つた所をその儘大勢の人に話さ
うと思つても、聽く人間の性質はいろ／＼だから、
初めから斯んな事を言つたのではわからない人が多
からう。「衆生の諸根鏡にして」これを多くの人に
話さうと思つても大勢の人間は心が鈍くて、斯んな
難しい事を話してもわかりさうもない。而も樂に著

爾の時に 諸の梵王といつて、天上界に住む神の
やうなものや、或は帝釋天とか、或は護世の四天王
これは印度の舊い時代から傳はつた思想でありまし
て、帝釋天といふのは、いろ／＼な天上界の神様の
中で殊に人間界に縁のある神様となつて居ります。
印度では神様のことを皆天と言ひます。印度の昔は
多神教でありますから、澤山の神様を拜んだので、
何々天といふのが多くある。それが日本にも傳つて
居ります。佛敎が傳はると共にさういふものも附い
て日本に傳つて居りまして、今でも方々で拜まれて
居ります。東京では神樂坂の毘沙門天、花川戸の聖
天様、不忍池の辨財天、下谷には摩利支天といふの
がある。大黒天といふのは方々にある。それは皆印
度の神様であります。外の國の神様だけれども多く
の人は知らないで拜んで居る、暢氣なものです。辨
財天といふのは、印度の南の方で祀られた神様であ
りますが、あれは學問文藝の神様です。辨財天を信

して居る。この樂は小さい樂を言ふので、眼で綺麗
なものを見たいとか、耳に美しい聲を聴きたいとか
口に美味い物を食べたいとかいふやうな、さういふ
至つて淺薄な樂に執着して、さうして「癡に盲ひた
り」で、極く足らない愚かな心持の爲に、心全體が
盲目のやうになつて居る。だからさうして斯んな人
間に教を説いて覺らせたら宜いか、なか／＼これは
難しいことだ。容易に自分の覺つた事を人に教へる
ことは出來さうもないと思つて、實は當惑して居つ
た。

爾の時に 諸の梵王 及び 諸の天帝釋
護世の四天王 及び 大自在天
並に餘の諸の天衆 眷屬百千萬
恭敬合掌禮して 我に轉法輪を請す

(爾時諸梵王 及諸天帝釋 護世四天王 及大自在天
並餘諸天衆 眷屬百千萬 恭敬合掌禮 請我轉法
輪)

心すると字がよく書けるとか、音樂が上手になると
かいふことで、あれが信せられた。それが支那に渡
つた後に、支那人は皆欲張りだから、才能を辨する
といふ辨才天の「才」の字を「財」の字にして、金
儲けの神様にしてしまつた。これは支那人が勝手に
拵へたので、印度では金儲けの神様ではない。ここ
ろが日本に渡るとやはり金儲けの神様になつてしま
つて、不忍池の辨財天でも百足小判といふものを呉
れる、一枚貫ふと生涯金に困らないといふので、私
共も子供の時に三枚貫つたけれども、あまり役に立
たない。そんなやうに印度の神様といふものが、支
那を通つて日本へ入つて來る間に、初めの精神と變
つたのもありますが、とにかく天といふものは印度
の神様です。

そのいろ／＼な天の中に於て、帝釋天といふのが
人間に特別な關係を有つた神様だと考へられて居る
それは帝釋天が人間を監督して居るやうに思はれて

居るからです。人間の善い事をして居る者があると帝釋様がこれに對して幸福を與へて下さる。人間の悪い事をした者があると、帝釋天がこれに罰を與へられるといふ風に思つた。この思想も日本にそのまゝ傳つて居ります。ところが帝釋様が幾ら偉くても一人ですべての人間を監督するといふのでは手が廻り兼ねるから、そこで四天王といつて、帝釋様の下に附いて之をお助け申す天が四人あつて、その天が人間界の事をよく見て歩いて、その結果を報告して、それに基いて帝釋天が御褒美を下さつたり、刑罰を與へたりされるといふやうに信じたものです。そんな事は佛敎の本當の精神から言へばどうでも宜いのですが、やはり佛敎と雖も印度で發達したものでありますから、印度のそんな傳説が中に織込まれて居るのであります。

それで此の「護世の四天王」といふのは、此の世の中を監督して、人間の悪くならぬやうにこれを護つて行くものです。即ち帝釋天の下役といつては失敬ですが、下に附いて之を補助するものです。これが東西南北の四方をそれ／＼受持つといふやうに言はれて居る。例へば東の方を受持つて居るのが「持國天」、南の方を受持つて居るのが「增長天」、西の方を受持つて居るのが「廣目天」、北の方を受持つて居るのが「多聞天」こんな風に考へられて居ります。この多聞天は毘沙門様のことです。毘沙門といふのは印度の言葉で譯して多聞と言ふ。それから金比羅といふのも此の毘沙門です。毘沙門の別の名を金比羅といふ。ですから讃岐の金比羅様も印度の神様を祀つて居る譯です。ところがどうも外國の神様を祀つては工合が悪いといふので、後になつて日本の神様を合せ祀つて居ります。私は先年金比羅様にお詣りをして、金比羅といふのは印度の神様だと言つたら、神主が怒つて、そんなことはないと言つて居りましたが、それは後に日本の神様を合せ祀つたので

實は金比羅といふのは毘沙門のことです。これは皆印度の昔の佛敎の起らない前の思想であります。是れは至て幼稚な思想であるが、此等の神様が人間の様子を見て歩くと思はれて居た。さうして善い者があれば帝釋天に報告して御褒美のあるやうに、悪い者があれば相當の刑罰をお與へになるやうに取計ふ。大體こんな事を考へて居つたものです。

それは附けたりの話であります。要するに天地の間のすべての者は、佛の敎に依つて救はれるといふ思想が此處に現はれて居るので、この思想は廣大な思想であります。人間ばかりではない、有らゆる生命のあるものは皆佛の敎を學ぶことに依つて救はなければならないといふ考へです。でありますから帝釋天でありまして、或はその他の護世の四天王大自在天及び諸の天上界のもの、その眷屬は百千萬といふほど澤山ある。その天上界のものが皆佛様を敬ひ、掌を合せて拜んで敬禮して、さうして「轉

法輪を請ふ」とある。轉法輪といふのは敎を説くことです。丁度車の輪の廻るやうに、敎といふものは涯もなく此の世の中に弘まるといふので、敎を車の輪に譬へて法輪と申します。法輪を轉ずるといふのは、永く世の中に滅びないところの敎を説くといふことです。斯様に、天上界のいろ／＼な神々が現はれて、お釋迦様に敎を説くことを願つた。

我即ち自ら思惟すらく
衆生苦に没在し
法を破して信せざるが
故に
我寧ろ法を説かずとも
疾く涅槃にや入りなまし

若し但だ佛乘を讚めば
是の法を信すること能
はじ

(我即自思惟 若但讚佛乘 衆生没在苦 不能信是法 破法不信故 墜於三惡道 我寧不説法 疾入於涅槃)

教を説くことを勧められたに就いて静かに考へて見ると、どうもこれは難かしい事である。何故ならば、「若したく佛乘を讀めば」人間は皆佛に成るべきものだ、一切衆生を救ふべき大きな慈悲心を具へなければならぬと、さういふ事ばかりを説いたならば、聽く方の人間は「苦に没在し」といつて、眼の前の苦しみにばかり囚はれて居つて、大きな事を全く考へないのだから、さういふ淺薄な人間は、自分が本當に高尚な善い教を説いても、その教を信じないだらう。「信せざるが故に三惡道に墜ちなん」これは非常に大事なことです。教を信じないといふことは大きな罪なのです。何故ならば、自分が信じないといふことは、人の信心の邪魔をすることになるからです。信じないなら黙つて居れば宜い。けれども人情としてさう行かない。私なら私が佛様を信じないといふことになる、佛様を拜んで居る者に對して「なんだ、馬鹿な事をして居る。拜んだつて

役には立たない、止めろ」といふことを言ひたくなくつて来る。だから一人が信じないと、その一人が信じない爲に他の人の信を毀すといふ結果になる。だから信じないといふことの罪は恐しい。人間といふものはどうも黙つて居られない。だから悪い事をするので、こつそり蔭でやつて居ればまだ宜いけれども、人に勤めて仲間を作るので困る。贅澤をするのでもさうです。一人で贅澤をして居れば、まだ宜いけれども、それを皆に見せたくなる。私の知つた者に金持があつて、よく築地邊りの料理屋に行つて藝妓などを多勢揚げて騒ぐ者がある。私はその男に「君はマア自分の持つて居る金を自分が使ふのだから、大して叱言も言へないけれども、あんな料理屋の二階などで、燈火をカン／＼點けて大騒ぎをやるといふと、外を歩く若い者が羨しいと思ふ。羨しいと思ふだけなら宜いけれども、忌々しいと思ふやうになるから、マア金を使ふなら蔭でやつたらど

うだ。人の見ない所でやつた方が宜いちやないか。君の金を自分で使ふのは宜いけれども、せめては人に見えない蔭の方でコッソリやつて呉れ。穴藏でやれば一番宜いけれども、兎に角蔭でやつて呉れ」と言つたら、その男が「そんな馬鹿なことが出来るものか、人に見られなければつまらない」と言ひました。やはり贅澤をするにも一人で贅澤をしたのでは面白くない。人に見るので贅澤をする效があるらしい。

させなければ承知しないとなつて来る。何でも自分の味方を作らなければ承知しない。それでありますから信じないといふ事の世の中に及ばす悪い影響は大きい。それだから一人が悪くなるといふことは、一人では止まらない。その一人が何とかして仲間を作らうと思つていろ／＼やる、それを大なる罪であると言ふのです。佛の教を信じないといふ人間がある、他の信じて居る者をも無理に引張り込んで信じない仲間を拵へるから、それが非常な罪になるので、その結果として「三惡道」といふ、地獄とか餓鬼とか畜生道に墜ちるやうな大きな罪を作ることになる。これがまことに困つたことです。

どうしても人間といふものは一人で居られない。自分が贅澤すればその贅澤を人に見せて、仲間をつくらなければ気が済まない。自分が悪い事をすればそれを人に勤めて仲間を作りたい。どうしても人間の本性として、一人で生きて居られないものです。だから神様を信じない、佛様を信じないといふことも、一人が信じないならば、其の害毒は少いけれども、信じない者は、必ず信じて居る者を捉へて止め

それであるから「我寧ろ法を説かずとも」で、折角教を説いても、それを人が信じなくて、その教を弘める邪魔をするといふことになる、その人々が大きな罪を作ることになるから、その位ならば自分が教を説かないで、モウ覺つたら覺つただけにして、黙

つて死んで行つた方が結局無事で宜くはないか。疾く涅槃にや入りなまし。モウ黙つて死んでしまはうその方がなまじつか説いて悪い結果を生ずるよりは却つて宜くはないかと、斯ういふやうに考へたといふのであります。併しながら何にせよ覺つたといふのは、自分一人ではない、昔からいろ／＼覺つた人も多いが、昔から覺つた人々は、どうされたであらうかと、昔の事を考へて見た。

尋いて過去の佛の 所行の方便力を念ふに
我が今得る所の道も 亦應に三乘を説くべしと

(尊念三過去佛 所行方便力 我今所得道 亦應説三乘)

昔覺つて佛に成つた方がどうして居られたかといふことを考へて見ると、過去の佛様は初めから難しい教は説かないで、極めて低い方から説いて、だんだんに大勢の人を教へ導くことに力を盡されたといふことがわかつた。して見ると自分も初めから難か

諸の一切の佛に隨

ひて 我等も亦皆 諸の衆生類の爲に 少智は小法を樂ひて

是の故に方便を以て 復た三乘を説くと 雖も

(作是思惟時 十方佛皆現 梵音慰諭我 善哉釋迦文 第一之導師 得是無上法 隨諸一切佛 而用三方便力 我等亦皆得 最妙第一法 爲諸衆生類 分別説三乘 少智樂小法 不自信不作佛 是故以方便 分別説諸果 雖復説三乘 但爲教善薩)

斯ういふ風に思ひついた時に、十方の佛が現はれて來て、「梵音」即ち清らかな言葉を以て釋尊を慰め

しい事を説かないで、だん／＼にやつて行つたら後には覺れる人間も出來るだらう。世間の人にわかないだらうからと思つて、黙つて死んでしまはうといふのは、これはチト氣が短かつた。やはり昔の佛様のやうに、方便を以てだん／＼に説いて行つたら宜からうかと、略ぼ自分の考へが落着いた。今自分得る所の道も有體に説かないで、三乘といつて之を三つに説き分けて、低い方からだん／＼高い方へと順を逐うて説いた方が宜からう。さうすれば自分の説くことが無駄にはなるまいと、斯う思ひ定め

是の思惟を作す時 十方の佛皆現じて 梵音をもて我を慰

諭したまふ 善い哉釋迦文 是の無上の法を得たまへ

て仰しやるには、「善哉釋迦文」——釋迦文といふのは、この偈が五字で一句になつて居るから、釋迦牟尼といふ言葉を略して言つたので、意味は同じことです。お前は洵に結構なことを考へた。それでこそ「第一の導師」である。さういふ風にいきなり難かしい事を説かないで、易しい方からだん／＼に大勢の人を説いてやるといふ心持の出來たのは、大勢の人間を導くために最も優れたことである。如何に覺りを開いて居るものだからといつて、「自分は勝れて居る、世間の者は皆馬鹿だ」といふやうに、世間を疎んずるやうな心持であつては、それは世の中を教へ導く人とは言へない。どんなに相手がわからなくても、様々な方便を用ひて漸々に衆を教へ導いてやらうといふ、その心持の起きたことが、それが第一の導師である。人を教へ導く者として何より大事な資格だと、斯ういふことを方々の佛様が言つて下されたといふのです。

方便力を用ゐたまふ 最妙第一の法を得れども 分別して三乘を説く 自ら作佛せんことを信ぜず 分別して諸果を説く 但だ菩薩を教へんが爲なりと

尚ほ十方の佛が言はれるには、釋迦牟尼が無上法といふ絶対の眞理を覺つて、さうして大勢の今まで出た佛様と同じやうな道を通つて、方便力を以て、だん／＼に淺い所から説かうと決心をしたのはまことに結構だ。凡ての佛が皆その通りであつて「最妙第一の法」即ち絶対の理を覺つたのではあるが、大勢の人間は最初からそんな事を聞いても分らないのだから、衆生の類に従つて分別して三乘を説いたとある。それで「少智は小法を樂ひ」で、智慧の少い人間は、極く低い方の教だけが善いと思つて居つて自分が佛様のやうな境界になるといふことを信じない。さういふ人間に、いきなり初めから、お前達は佛に成るぞといつて説いても仕方がない。だから方便を以て分別して、「諸果」を説くのである。諸果とはいろ／＼な教を習つて得た所の結果である。低い教でなければわからぬ者には、低い教によつて是れだけの事は知られるといふ事を説く。又モウ少し

前にも申したことでありますが、初歩の教を説く時にも、最後の所までをよく考へて説くといふことが必要です。それでなければ教といふものにならない。相手がつまらない者だから、つまらない事だけ教へて宜いといふ、さういふ考へではいけない。説く事は至つて淺い事であつても、それを手懸りとして一番深い所まで入つて来るやうにといふ、その計畫を立て、説いて居るのでなければ本當の教にはならぬ。此の事は若し皆様の中で教育に御關係の方がおらつしやるならば御同感であらうと思ひます。子供を教へる時に、子供にだけわかる事のみを説いて居てはいけません。口で言ふのには子供にだけわかる事を説いて宜しいけれども、その子供が何處迄深入りして來ても困らないだけの準備をして説くのでなければならぬ。易しい事だけ言つて、難しい事を聽いたらわからなくなつたのでは、それでは教へるといふことにはならない。だから初歩の教、例へば小

上のことがわかる者には、モウ少し上のことを説いて其の效果を得させるといふやうに、様々な事を説いた。概していへば三乘といつて、聲聞、緣覺、菩薩といふ三段に分けて、低い方から高い方へと説いて行くけれども、その低い方だけ説く場合でも、説く人の心では、聽く者をいつ迄も低い所に止まらせたくない。だん／＼上の方まで引上げたいといふ心持でいつも教を説いて居る。だから「菩薩を教へんが爲なり」とある。菩薩といふのは佛に成る修行でありすが、續ひ低い教を説いても、それは高い方の教に入る準備として説いて居るので、結局教を説く相手を皆菩薩にし、慈悲を以て一切の人間を教ふやうな力を具へた者にしてやりたいといふ、さういふ心持で説いて居るのである。斯う十方の佛様が自分に仰しやつたといふのは、お釋迦様が心にさういふ自覺を得られ、有らゆる佛の心と自分の心とは一致して居ると確信せられたのでありませう。

學校の教育をする人は、大學に行つても教が説ける位な自信をもつて居なければ、本當の小學校の教育は出来るものではない。どこ迄深入りして來ても説ける力を有つて居つて、さうして淺い所を説いてやるといふことでなければ、本當の教育は出来はしない。例へばお母さんが子供に物を言ふのでも、多寡が子供だと思つて馬鹿にしてはいけません。子供だから深い事は言へないけれども、若し深い事を聽かれても困らないだけの準備を有つて子供に教へるのでないと、本當の教育は出来ません。所が親の方は世の中を通つてするくなつて居りますから、子供が何とか言ふことまかしてしまふ。私なども兎角それがあつていけない。子供が「飛行機は何故飛ぶのか」と言ふ。「それはお前、プロペラが廻るから飛ぶのだ、當然ぢやないか」「プロペラが廻れば何故飛ぶのか」「プロペラが廻れば風が起るから飛ぶのだ」「風が

起れば何故飛ぶのか」「風が起れば翼といふものに當るから飛ぶのだ」「風が翼に當れば何故飛ぶのか」サアわからなくなつて来る。何んだか知らんけれども、風が翼に當るから飛ぶといふだけで本當に自分にもわからない。けれどもわからぬと言ふのは残念だから「それはお前考へて御覽、風を揚げてたつて風の吹く時には揚るだらう、あれと同じことだ。それは自分で考へて見るが宜い」ナンと言つてごまかすから實を言ふと子供の間に對しても、満足に答へるのにはなか／＼難かしい事です。いつでも相手を手を馬鹿にしてはいけない。浅い事を教へて居るやうだけれども、深入りして來てもそれに相當な答へ與へようといふ覺悟がなければ、なか／＼人に教を説けるものではありません。佛はいつもそれです。相手がつまらぬ者だから先づ低い教を説くのだけれども、それを手懸りとしてだん／＼深入りして來れ

を説いて居るけれども、これを縁としてモット深い所まで引張つてやらう、結局は佛と同じ境界にまで進むやうにしてやりたい。斯ういふ大悲心をもつて教を説いて居られるのは非常に尊い事でありませぬ。此の事はお釋迦様御自身だけではない。十方の世界の數限り無い佛様の御心持は、それと同じであつたといふのです。十方の世界の佛が出て來て、自分に斯ういふ話をなされたかどうかわかりませぬが現はれてさういふ話をされたかどうかわかりませぬけれども、諸佛と釋尊との心と心とは通じて居つたでせう。他の世界の佛様のお心持も、お釋迦様の御心持も同じであつた。初めは方便を以て低い方の教を説くけれども、結局は衆を佛の境界にまで到達せしめようといふことであつたのは疑はれぬ。

舍利弗當に知るべし 我聖師子の
深淨微妙の音を聞きて 喜びて南無佛と稱す
復た是の如き念を作す 我濁惡世に出てたり

ば、一切の衆生を教へ導いて、佛に成るといふ所まで教へてやる。斯ういふ大きな計畫を最初からチャント立て、さうして低い教を説いて居るので、それが本當の方便です。難しいことのわからない者は低い方だけ言ふといふのは、方便でも何でもない。さういふ意味に於て、私は世間の大衆的の文學とかいふやうなものは、モット深い用意を有たなければいけないと熟々思ふ。世間の大衆を相手だから、大衆の氣に入るやうにといふのみではいけない。氣に入るやうにしても宜いが、その氣に入る所からだん／＼引張つて行つて、ズツと高い理想に到達せしめるだけの用意を以て、さうして大衆的の事を言ふのでなければ世の中の役に立たぬ。世間の人が好きだから好くやうにといふのでは、世間を導くといふことにはならない。その點に於てモット深い用意がなければならぬといふことを感ずるのであります。お釋迦様がどんな低い教を説くのも、今は低い教

諸佛の所説の如く

我も亦隨順して行せん

(舍利弗當に知る 我聞聖師子 深淨微妙音 喜稱南無佛 復作三如是念 我出濁惡世 如諸佛所説 我亦隨順行)

舍利弗よ、能く考へて見よ。「聖師子」といふのは佛様のことであるが、自分は十方の世界の多くの佛様が、皆奥深いところの微妙の音を出して、方便を以て教を説くのが宜いだらうと仰しやつた。そのお言葉を聽いて、非常に喜んで「南無佛」と稱した其の多くの佛に對して、有難うございました、能くわかりましたと言つて御挨拶をした。同時に斯う思つた、自分もこれから教を説くのであるけれども、自分は「濁惡の世」といつて、世の中がスツカリ濁つて、人の心の險惡になつて居る、恐しく渡りにくい世の中に出て、さうして諸の佛様のお説きにな

つた通りに、自分もその佛様の心持に随順して、世の中に法を説いて行くのだから、やはり方便から行かなければいけない。初めから難しい事を言つても聽かれないだらうから、面倒なことではあるけれども、手間は取れるけれども、やはり他の佛様の仕方と同じやうに、極く低い方、浅い方からだん／＼に説いて、結局深入りするやうにして行かうと決心した。

是の事を思惟し已りて 即ち波羅奈に趣く

(思惟是事一已 即趣波羅奈)

さういふ決心をしたから、それから佛陀伽耶の自分の修行した場所を立ち去つて、波羅奈といふ所へ行つた。この波羅奈といふ所が鹿野園のある所です。釋尊は鹿野園といふ所で初めて教をお説きになつたのでありますが、それはこの波羅奈といふ國にあり、印度には二つの大きな河がありまして、西の方に寄つて居りますのを印度河、東の方に寄つてあ

りますのをガンヂス河と言ひます。お經の中に恒河とあるのは此のガンヂス河のことでありまして、波羅奈といふのは此のガンヂス河の沿岸に在つて、昔は非常に繁昌した國です。今はベナレスと言つて居ります。そのベナレスの市の河にすぐ近い所が釋尊の初めて教をお説きになりました鹿野園の在る所でありまして。

今日でもその場所だけは遺つて居りますが、實はその鹿野園の跡へ行つて見ると甚だ心細い感じがする。今は建物などは何もありません。釋尊が初めて教をお説きになつた、佛教に取つては實に大事な場所でもあります。その鹿野園の跡に記念すべきものは何も無い。たゞ荒れ果てた野原で、草がボウ／＼と茂つて居るだけです。尤もそこは英吉利の政府が管理して居りまして、所々に札を立て、此處には殿堂があつたさうだ、此處に昔は廊下があつたさうだなど書いてありますけれども、今は堂も何も無く

てたゞ荒野原です。さうしてその近邊には佛教といふものは全く行はれて居りませぬ。印度の本國には佛教信者といふものは殆んど無いのです。錫蘭といふ島には僅かに佛教の形ばかり遺つて居りますがこれは極めて低い小乗の佛教です。殆んど佛教と名を附ける價値の無いやうな、形ばかりの佛教が此の島には遺つて居ります。印度の本國には佛教といふものは全くなく、婆羅門教とマホメット教が大多数でありまして、全人口の十分の一ぐらゐるはジャイナ教の信者であります。これは佛教と稍々似たものですけれども、少々異ふ所もあります。餘はマホメット教と婆羅門教でありまして、佛教は殆んど根絶して居ります。吾々佛教を信する者としては、印度を歩いて見ますと如何にも悲しい感じがします。前に申した佛陀伽耶の河の側には、よく寫眞などがあります。非常に大きな堂が建つて居りまして、その中に佛陀様の像が祀られて居つて、殆んど旅人の參詣

の絶え間が無いといふ風に言はれて居ります。案内書などを見ますと非常にエライ事が書いてあります。併し實地に其處へ行つて見ますと、その殿堂は佛教のお寺ではありません。婆羅門式の殿堂です。さうしてそこに祀られて居りますお釋迦様の像は佛教としての像ではありません。波羅門の修行者の相で像が出来て居ります。私も行つて花を捧げて恭しく禮拜致しましたけれども、残念に思ひました。お釋迦様を佛様より引下して、婆羅門の修行者の形にしてしまつてお辭儀をさして居る。殿堂も婆羅門の殿堂で、まるで佛教を侮辱したやうな有様です。けれども仕方がない、さういふ状態になつて居ります。佛教といふものが印度で殆んど絶え果て、居る爲です。今の鹿野園の佛が初めて説法なさつた場所などは、それよりも一層甚しいもので、たゞの荒野の原であります。私はホテルから馬車を備つて参りまして、其の原の中を歩きながら、折角釋尊が

初めて教をお説きになつた場所なのに、こんな情ない状態になつたのかと思つて、大に淋しい感じをして居つた所が、向ふの方に大きな建物がある。流石に印度人だからお釋迦様を記念する爲に何か建物を建てて居るかと思つて、其の側に行つて見たら、それはマホメット教の殿堂だつたのでガツカリしてしまひました。其の殿堂はまるで鹿野園を威壓して居るやうな状態です。

丁度私とその鹿野園に参ります時に、ホテルに英吉利人が一人居りました。商人らしい三十前後の人でしたが私に向つて「あなたは日本人ださうですが、日本の人なら佛教のことは随分知つて居るだらう。お釋迦様の説法の跡を見たいと思つて居るが一緒にやつて呉れないか」といふことを申しました。「僕は別に佛教のことが精しい譯ではないけれどもあなた方に比べれば幾らか知つて居るから一緒に行きませう」と言つて、それから鹿野園の跡へ行つて

い。現に僕の國の日本に遺つて居る。佛教は日本にあるから今からだん／＼弘まつて、今に君達の歐羅巴にも行くから、その時分には君達も信じたら宜からう。僕はチットモがつかりしない」と言つたら、「ハ、ーン……」と言つて黙つてしまつた。それは少し威かしてやつたので、腹の中では實に心細かつた。實際印度に佛教徒が殆んど居ないので、これは残念な事柄です。

それで今日に於ては佛教といふものが、至つて不完全な状態といふものゝ、兎にも角にも遺つて居るのは日本だけです。世界の何處にも遺つて居りませぬ。支那にはお寺はありますが、支那の寺といふのは地主でありまして、たゞ地代を取つて居るだけで、佛教を説いて居りませぬ。世界に於て佛教が少しでも説かれて信じられて居る所といふのは日本だけです。日本でも吾々の考へから言へば甚だ心細い状態ですけれども、兎にも角にも吾々共でも

から、釋尊が初めて教を説かれたといふのは斯ういふ事情で、斯うだといふことを説明した所が、その英吉利人が非常に喜んで、「あなたのお蔭で此處に來た效があつた」と申しました。ところがそんなお世辭を言つた後で、「印度には佛教がまるで今無いのであるが、無いことをあなたは残念に思ひませぬか」と言ふ。私も實は残念に思つた。けれども、「こんな奴に負けてはつたらぬと思つて、それから「残念に思はない」と言つた。「何故あなたは残念に思はないか」「それはどうも仕様がな。お釋迦様といふ方は何も印度に生れたのではない。人間を救ふ爲に人間の世界にお生れたのだから、お釋迦様を印度人だと思ふのが全體間違ひなので、お釋迦様は印度人でもなければ、支那人でもなければ、日本人でもない。人間を救ふ爲にお生れになつた方なのだ。だからお釋迦様の教が印度に遺らなくても僕はガツカリしない。人間の何處かに遺つて居れば宜

信じて居る、あなた方も信じてゐらつしやる。とにかく信じて居る人もあれば説いて居る人もあるといふのは日本だけです。だから日本に佛教が滅びれば佛教といふものは世界に滅びるので。さういふ點に於て吾々の責任といふものは非常に大きい譯です。印度では今申上げたやうな状態でありまして如何にも心細い。マア外國人などから何か言はれれば、こつちも少し氣焰を吐いて見るけれども、實を言ふと心細い状態なのであります。なんとかして日本に於て佛教を繁昌させて、やがては世界に及ぼすやうに致したいものだと思ひます。これはマア附けたりの話であります。

お釋迦様はその時に今申したやうに、方便を以て一切の人を救ひたいといふ考へを起されて、それから波羅奈といふ所へ行つて、鹿野園といふ所で初めて教をお説きになつたのであります。

諸法寂滅の相は 言を以て宣ふべからず
方便力を以ての故に 五比丘の爲に説きぬ

(諸法寂滅相 不可言宣) 以方便力故 爲五比丘説)

寂滅といふのは幾度も申すやうに、すべての差別や變化を離れるといふ意味で、なにも寂しく滅びてしまふといふことではない。差別を離れ變化を離れるといふのは、吾々の眼の前の世の中の出來事は始終變化して居るけれども、千年万年経つても變らな道といふものがあり、教といふものがある。それを知るのが寂滅を觀するといふことです。その永久に傳つて行くところの道といふもの、本體は、言葉で以て説き明さうといつてもなかく説き明せないものだから、そこで方便力を以て、衆にわかり易いやうな方法でこれを説いて、先づ取敢へず五人の比丘を教へた。

この五人の比丘といふのはお釋迦様の元の御家臣

に自分は親や女房や子供を捨てるといふつもりではない。人間は何の爲に生きて居るかといふことがわからないから、自分は人生の本當の意味を究める爲に修行に出る。これからいろいろな學者を訪問して説き聞いて、人生の本當の意味がわかれば、すぐに歸つて親にも妻にも子にもその事を明かすつもりだから、自分の歸るのを待つて居つて呉れ。決して歎き悲んではいけないといふことを、車匿といふ少年に懇ろに言ひ含めまして、さうしてその馬と着物を持つて歸らせたのであります。ところがそれ程叮嚀に言つて歸らせたのでありますけれども、親や妻子の身になるとそんな事ではなかく諦めがつかないさう仰しやるけれどもヒョツとしたら再びお歸りがないかも知れぬといふやうな懸念がありました。それだから父の王様が家臣達に言ひつけて八方に手を廻して悉達太子の行方を探させた。すると直に見付かつた。それはさうでせう、たゞ足に任せて歩いて

であつて、橋陳如等の五人です。橋陳如といふのはその中の一番年上の人で、その他にも四人の者が居つた。お釋迦様は人生の眞の意義を究めるために、宮中を忍び出て修行の旅に上られたが、これは有名な話ですから御承知でありませうけれども、白い馬にお乗りになつて、車匿といふ十二、三になる少年を伴れて、さうして王様の御殿を夜中に出られた。それから明け方になつて或る一つの森の中に入つて今までは王子ですから立派な着物を召して居らつしやつたのでせうが、その立派な着物を脱いで、豫て用意して居つた極く質素な着物に着換へられて、前の着物を馬の鞍に結びつけて、今の車匿といふ少年を親の王様の御殿に歸してやつた。その時車匿は涙を流して別れを惜んださうでありますけれども、それを諭して歸されたのであります。その時に斯ういふことを言はれた。自分は今王宮を去つて修行に出るのだけれども、決して歎き悲しむに及ばぬ。永久

居るので、自動車や汽車で駆けた譯ではありませぬから、王様から大勢に言ひつけて探させればすぐわかる譯です。大勢の家臣が方々探すと、或る樹の下で悉達太子が坐つてゾット考へて居らつしやるのが見付かつた。

それから其の家臣達が、「是非お歸り下さい。あなたはいふことを言ひ遣されたけれども、お父様のお歎きといふものは大變なものです。お妃様のお歎きも大變です。斯ういふ大勢の方に歎きを掛けて、あなた一人御出家になつて修行された所が、それは本懐ではないでせう。是非お歸り下さい」といつてお願ひした。さうすると悉達太子が仰しやるには、「それは斷じていけない。お前達が今更何と言つても自分の心は離さない、自分は決して自分一人の爲に覺りを開かうと思つて出たのではない。あの時も車匿に言ひ遣したやうに、自分が覺つた結果を親にも子にも教へて、一切の人間に意義のある人

生を送らせたといふつもりで来たのだから、お前達は今更に来ても自分の心持は變らない。歸つてこの事を父に言へ」と言つて、どうしても聽かれぬ。それは非常な確信を以て言はれるものですから、御家臣達も言葉を返すことが出来ないでそのまゝ、御殿に歸りまして、王にその事を詳しく申し上げました。そこで、王様が宮中に御家臣達を呼び集めて御相談をなさつた。「どうしたものだらう、あの悉達太子が出家するのは斯ういふ趣意ださうだ。後から人をやつて戻つて呉れと言つたけれども、どうしても聽かないといふことだ。この上はどうしたら宜いだらう」と言つて相談をされた時に、此の橋陳如といふ者が出まして、「これは仕方がないでせう。それほどに思ひ詰められたものを無理にお歸りなさいと言つても、お歸りになりはしないでせうから、私共がお伴して参りませう。今まで王宮で何の御不自由もなく居らつしやつた方が、これから乞食のやうな生

活をなさるといふことは出来ないことだから、私共がお供して参りまして、太子に何處でも附いて行つて御不自由の無いやうにお世話を致しませう」といふことを言ひ出した。「ア、それは善い事だ」といふので、橋陳如に同意する者が他に四人ありまして、五人の者が悉達太子の後を追うて行つてお伴を致しまして、太子が所々の學者の所を歩いて教を聞く間も、五人が始終お伴をして歩いて、さうして生活に必要な物は皆王様から送つたものです。いはばお伴をつれた留學生ですから、これは樂なものです。

それで暫くやつて居つたところが、前に申した如く尼連禪河の側に來られてからは、人の厄介になつて修行したのでは本當の修行は出来ないといふ御考へで、親の王様からの仕送りをお斷りになつて橋陳如初め五人の御家臣達にもその事を言ひ渡された。「今日から自分は乞食生活をするのだ。お前達それ

が嫌なら歸れ。これからは親からは何も責はない。米一粒だつて親から仕送りを受けたくない。それで宜ければ一緒に居るが宜い。嫌なら歸れ」と言はれた。そこで橋陳如達も「そんな事はなんともありません、一度お伴をしようと云つた以上はどんなに苦しくてもお伴をませう」と言つて、それから尼連禪河の側の庵室に於て乞食の生活をなさつた時には、御家臣達も一緒に乞食の生活をして居つた。だからこの五人もなか／＼偉いのです。

それからその修行がだん／＼續いて行きました、愈々釋尊が覺りをお聞きになる少し前のことであります。或る日釋尊は尼連禪河の側を經行して、その事は此のお經の中にもありますが、歩きながらいろ／＼な事を考へて居られた。さうして圖らずも自分の顔の相が河の水に映つたのを見られると、自分の顔付きが如何にも淺ましい。頬の骨は高く出て居るし、皮は皺んで居るし、肉は殆んど無くて、ま

るで骸骨のやうな形である。これを見られて、是れはいけない、自分は大責任があるのだ。自分一人の爲の修行ではない。自分が人生の本當の意義を覺つたならば、歸つて親にも話し、妻にも子にも話さう。家臣達にも話さうと思つて居る。自分一人の覺りは自分の爲ではない、一切の人の爲だから、自分には非常な責任がある。この大責任のある自分が、斯んなに瘦せ衰へて、ヒヨロ／＼して居るやうなことで一體どうなるものか、自分一人の身ではないのだから、この身は大事にしなければならぬ。さうしてこれからいつ迄も永く生きて、大勢の人に教へなければならぬ。こんな事ではいかぬといふことに氣が附きになつて、身を大事にしなければならぬといふことを痛切に感ぜられた。さういふ事を感ぜられて河の側をなほ歩いて居られますと、向ふから十八九の若い娘がやつて來た。その娘が鉢を持って來たがその鉢から湯氣がホヤ／＼出て居る。それは非常に

美味さうな香がする。これは乳糜といつて、牛乳の中に麥などを入れて煮立てたもので、今のオートミールのやうなものでありますが、これは非常な御馳走である。これを鉢へ入れて持つて来たのである。お釋迦様も乞食の生活をして居つて、美味い物などは久しく食べず、腹の空つて居る最中ですから「ア、美味さうだな」といふので、それからその娘を呼び止めて「お前はどいふ者の娘だ」といつて聞かれた。お釋迦様は乞食のやうな見苦しい姿はして居らつしやるけれども、何しろ王様のお子様で、後に佛とも成る方でありますから、自ら氣高い所があつたものと見える。そこでその娘が鉢をそこへ置いて地面に手をついてお辭儀をして、「私はこの先の村の村長の娘であります」といつた。「その持つて居るものは何にするのだ」「これはこの村外れにある神様の社にお供へする爲に持つて參るのです」と言つて、大變丁寧に挨拶をして行き過ぎやうとした。そ

れからお釋迦様が「物は相談だが、それを神様に供へないで自分に呉れないか。自分は腹がへつて居るのだ」と言はれた。それは佛様で、何といつても氣高い方で、お顔を見れば恐れ入るやうな方にさう言はれたのですから、娘は心から悦んで「あなたのやうな方にこれを食べて戴ければ此の上の喜びはありませぬ、差上げませう」といふので、お釋迦様はそれを受けて、その乳で煮た穀物を、快く召上つた。さうして大變に身體の工合も宜しく、氣力を恢復したといつて喜ばれた。

それを五人の家臣が後から見て居つて、これは大變なことになつてしまつた。太子は墮落された。なんだか若い女を途中で呼止めて談判して、社に供へる物を横取りして食べてしまはれた。これは墮落したのだ。流石の太子だけれども、永い間の苦行に堪へられないで、スツカリ墮落してしまはれたのだと思つた。といふのは其の當時の婆羅門の方では、苦行

といふものを非常に重んじて、人間は苦んで修行しなければ本當のものに成れないとのみ考へて居た。婆羅門の中には一般に苦行を重んずるといふ思想が非常に力強かつた。それに慣れて居る五人の家臣達でありますから、太子が若い娘を説得して美味い物を食べて居らつしやるのを見て、あれはもう墮落した、自分達は五年も六年も太子のお世話をしたけれども、モウこんな墮落した人の世話はしたくないと思つたのも無理ではない。それで五人が顔を見合せて、「モウ止めようぢやないか、あんな墮落した人に附いて行つても仕様がなない。といつて今更元の王宮へも歸れない。吾々は吾々だけで修行をして行かう」斯ういふことで、五人が申合せて悉達太子を見離してそこを立去り、今の鹿野園といふ所に行つてそこに庵を結んで五人だけで修行して居つた。そこへお釋迦様が行つて、その五人の比丘の爲に教をお説きになつた譯であります。

これはお互ひに佛教を信する者に取つて大事な問題だと思ひます。一切の人間を救ふといふことが無論佛の理想であります。けれども、縁の近い遠いといふことがあつて、縁の近い方から遠きに及ぶといふことは自然の順序です。無論一切の人を救ふのだけれども、一度に出来ぬ時には先づ縁の近い者を救うて、然る後に遠きに及ばすといふことが自然の順序であります。自分の妻や自分の子供が腹がへつて泣いて居るのを棄て、置いて、隣家の人に物をやるといふことは善い事ではない。佛の戒められた中にもさういふ事があります。自分の親を困らせ、妻子を困らせて、他人に施をするのは名聞の爲である。そんな名前を得たいから施するのであつて本當の施ではない。これは大に間違つた事だと言はれて居るのであります。決して佛教に於ては人間の縁といふものを無視して、たゞ漠然と一切衆生を救ふといふ譯ではありません。それでありませぬ。

から釋尊は覺りをお聞きになつた時に、普く一切の人間を救はうといふことでありますけれども、先づ以て縁の近い方から進んで、遠い方に及ぼさうといふお考へで、無論國へお歸りになつて親の王様や、妻子に教をお説きにならうといふお考へであつたけれども、併し今のやうに汽車があるのではなし、自動車があるのではない。急には歸れないから、歸る途々に於て相接する人に教を與へたいといふことであつた。そこで一番最初誰に教を與へようかとなつて、その時に先づ考へつかれたのは、自分一人で修行しようといふことを思ひ定められた前に、阿羅邏といふ仙人と、迦羅邏といふ仙人と、此の二人の仙人の教を聞かれたことがある。これは印度では屈指の學者であつたけれども、釋尊はこの二人の人に教を聞いて、それで満足しないで佛陀伽耶へ來て六年の間、自分一人で修行をなされた。その事を想ひ出されて、あの仙人達の言ふことは洵に満足ではな

かつたけれども、併し鬼に角師としてはあれが一番終ひである。鬼に角師一人て修行しようといふ奮發心を起す、その動機を與へたといふ上から言へばあの人々にも恩があるのだから、先づ手始めにあの二人の人を訪ねて自分の意見を話さうといふつもりで、その二人の仙人を訪ねられた。ところが二人ともモウ死んでしまつたといふことであつた。それは苦行の結果、多分腹が空つて死んでしまつたらしい。難行苦行も宜いけれども、腹が空つて死んでしまつては仕方がない。折角訪ねて見たけれども、元縁のある先生達は皆死んでしまつた。それでは其の先生に次いで縁のある、永い間世話をして呉れた五人の家臣達が波羅奈に於て修行して居るといふ噂だから、これを訪ねて行つて五人の人々に自分の意見を話さう。それから他の人にも及ぼさうといふので態々この五人の元の御家臣を訪ねられて、釋尊御自身の覺られた所を語られたのであります。

何にしろこの五人の人間の考へとはまるで段の異ふやうな、深い覺りを有つてゐらつしやるのでありますから、五人の者も心から敬服致しまして、直にお弟子になりました。これが釋尊の最初のお弟子です。だから釋尊の最初のお弟子は元の御家臣でありまして、それからだん／＼にお弟子が多く出來たのであります。近くから遠きに及ぶといふこの順序は佛の説法に於ても模範的になつて居る一つの事實であります。

斯様なお經の本文にはあまり縁の無いやうな事を長々と申しましたが、要するに佛教といふものは實行が主でありまして單なる理論ではない。だから佛様の御實行になつた事柄を一通りよく知ることが大切で、その跡を吾々が歩いて行けばよろしい譯であります。それで出来るだけ釋尊の御身のまはりの事柄だけはお互ひに詳しく知つて置く方が、修行をして行く上にも非常に頼りになるであらうと思つて、

序にお話をしたのであります。

是を轉法輪と名く

便ち涅槃の音

及及び阿羅漢

法僧差別の名有り

(是名轉法輪 便有涅槃音 及以阿羅漢 法僧差別名)

「轉法輪」法輪を轉するといふのは、前にもいつた通り、車の輪が廻るやうに教を世に弘めて行くことですが、この五比丘の爲に説いたのが、その首途であつた。さうしてその初めての轉法輪に於ては涅槃といふことを説き、阿羅漢といふことを説かれた。『阿羅漢』は譯して殺賊と言ひ、煩惱の賊を除き盡した者のことです。『涅槃』といふのは滅の意味、滅といふのは迷ひを滅する、苦を滅することをいふのです。それで一番先に説かれたことは滅である、お前達は皆苦しんで居る、お前達は皆惱んで居る、その苦や惱みを除くことを學ばなければいかぬぞといふことを説かれた。それからその苦や惱みを除く

修行をして、一切の迷ひを除き盡した境界。それを阿羅漢と言ふ。

それから「法僧差別の名有り」とあるが、佛法僧といふことは大事なことでありますから、前にも少しくいつたが更に委しく申して置きたい。佛が教をお説きになる。ところが佛様といふものは始終世の中に出て居らつしやるものではない。或る歳月が経てば佛様は世の中を去つてしまはれる。併し佛がゐらつしやらなくても、佛のお遺しになつた法といふものは存して居るから、この法を學ぶことに依つて私共は佛様に直接に教を受けると同じ力が得られる譯であります。それ故に佛は無論人間の寶でありますから、これを「佛寶」と言ひますが、併しながら佛の亡き後も佛の遺した教は永久に傳はつて、大勢の人を教へ導きますからこの法も亦寶であつて、これを「法寶」と言ふ。尙ほ能く考へて見ると、佛の教といふものは非常に奥深いものでありますから

を協せて佛の教を世に弘める。これが何より大事でその和合する心持のある者を僧といふ。だから僧といふことは一人の人に附けた名前ではなくして、團體に附けた名前であります。和合する人々といふ意味であります。

そこでその和合といふことには各自が私を去るといふことが非常に必要であります。銘々が自分の勝手な事を考へては和合は出来ません。銘々それ々の性質があり、それ々の人柄といふものがあり、それ々に偏つた所がある。その偏つた所を互ひに固執して居たのでは和合一致は出来ませぬから、そこで銘々の私の心を捨てまして、和合一致をしますものを僧と言ひます。例へば大勢の人がお集りになつて、銘々職業も異ひ、世間に於ける立場も異ひ、又年頃も違つても、佛の教が有難いから、どうぞ皆で一緒にこの佛の教を信じたいといふ心持をもちさへすれば、これだけの人全體が僧伽、所謂和合衆とい

すべての人がこれを學んで直にわかるといふ譯には行かない。そこで佛の亡き後には特別に頭腦の良い人、特別にその教を學ぶのに便宜な境遇の人が力を協せてその教を學んで、さうしてこれを世に弘めることをしなければならぬ。さういふやうに佛の教を深く學ぶとか、或は佛の教を普く世に弘めるとかといふ事は、一人の力で出来る事ではない。何故なら佛様のやうな人は、なか／＼滅多に生れて來ない。さう言つては失禮ですが、あなた方でも私共でも共に凡夫です。凡夫が一人で佛の教をよく學んで世に弘めようといつても、なか／＼出來ぬことです。だからその教を學んだり、その教を弘めたりすることは、志を同じうする者が力を協せてやらなければならぬ。そこでその志を同じうする人のことを、「僧」と言ふ。これは略したので、詳しく言へば僧伽と言ふので、僧伽は譯して和合と言ひます。和合して、一緒に力を協せて佛の教を學び、又一緒に力

ふことになる。理想として先づ各自の家の者が和合衆になりたういふものです。夫婦兄弟親子が一致して、同じ心持になるといふ所から始まつて、それから世間の同じ心持の人が一緒に、斯うなれば申し分がないのであります。今では頭を圓く剃つて法衣を着た人を僧と申しますけれども、頭の問題でもない要するに心の問題であります。銘々が我儘を捨て、和合して教を學び、又教を弘めるならば、それが僧であります。さういふ人々のお蔭で教が世に弘まるのでありますから、これも亦佛と法に匹敵する尊さを有つて居るので、これを「僧寶」と申します。

この三つを合せて「三寶」と言ふのです。私共は凡夫であるけれども、心の持ち方に依つては、その三寶の一つに算へられる僧になることが出来る。なか／＼一朝一夕には行きませぬけれども、各自の我儘な心持を捨て、行きますれば、必ず僧に成れるのであります。

そこで最初の轉法輪の時に、初めて『涅槃』といふことも説いたし、又『阿羅漢』といつて迷ひを除くことを説いたし、それから「法」といふものは永久に後に遺るものであるが、その法を、法を弘めるところの僧といふものも大事だといふことを、差別していろ／＼に話して聞かせた。これが自分の世の中に教を説く初めであつて、それから今日に至るまで——この法華經を説かれるまで凡そ五十年の間、この意味で教を説いて来た。佛が教を説くといつても、佛の世の中に居られる歲月には限りがあるのだから、その佛の教が永久に世に傳はる爲には、その法を護つて行く人の責任といふものが非常に重いと言はれるのであります。

私共は凡夫ですけれども、凡夫ながらも佛の教が尊いと思つたならば、その心持を端緒として、各自が私心を捨て、志を一つにして教を學び、さうして又心を一つにして教を弘めたい。斯ういふ心

な心持を以て世の中の人に接し、少しでも佛様のお仕事のお助けをするといふ心持があつて、初めて佛事と言へるのであります。皆様のお家でも何かの時に佛事を營むといふことをなさるでせう。その佛事をする時には、たゞ坊さんを頼んで、お經を讀ませるといふだけではいけない。そのお經の意味を幾らかでも辨へて、世の中を救ふ仕事に幾らかでも役立たせる。それが本當の意味の佛事であります。斯ういふ意味で佛事をなさるならば、その佛事の功德といふものは極めて大きいものになるだらうと思ひます。

(第二十七講了)



をもつて、佛の教が永久に絶えないやうにするといふことが、所謂佛事を營むといふことであります。佛様のお仕事をお助け申すことを吾々の仕事としなければならぬ。今でも佛事といふ言葉があります。先祖の何回忌とか亡くなつた親父の何回忌とかいふ時に、坊さんと呼んでお經を讀んで貰つて、茶飯の一つも出すのを佛事を營むと言つて居る。併し眞に佛事を營むといふことは、たゞお經を讀むことではない。お經を讀むのは佛の教を味つてそれを實行し、又世に弘めるといふ心持を養ふために讀むのだから、私共がお經を讀む場合にはいつでもそれが佛事であるといふことを忘れてはいけない。眞の佛事といふのは何だと言へば、世の中の迷つた者を救ひ、世の中の苦しんで居る者を助けることにお役に立つ仕事を、それが佛事である。お經を一遍讀むには口先だけで讀んではいけない。お經を讀むことに依つて自分の心持を淨らかにして、その淨らか

謹告

聖應院日生上人第六周年忌
報恩佛事を左記の通り相營
可申此段謹告仕候

左記

三月十五日(日) 晴雨不拘時間嚴守

午後一時三十分 品川妙國寺墓前御回向

午後二時四十分 音羽本部御寶前法要

有志追憶座談會

(茶業養護)

午後五時 閉會の豫定

以上

昭和十一年三月一日

財團 統一團

電話牛込五三三六番

(記) (事)

本部 團報

開館記念 本部は昭和八年の紀元節に開館式を擧げて早や四箇年となつた。今や世界的には軍縮會議に於ても彼我の主張を異にし、又露滿乃至北支の問題等一層多事である。かゝる際國內に在つては融和を缺いて寔に憂ふべきものがある、爰に吾等の全力を擧げて我國精神文化の精髓を發揮すべきであるまいか。

本團は紀元の佳節、午後一時半より會館の大講堂に於て先づ創立主唱者たる本多大僧正の『佛教の信仰』と題せる肉聲を發聞して其感激を新にしてより記念法要を和賀、小西師等に依つて嚴修し、滿堂之に和唱した。

續いて教化講演會に移つて磯部常任理事より開會の宣言あつて、中村清一氏司會者となり、時間の關係上小林一郎先生拍手裡に壇上に現はれて『大乘精神の發揮』と題して、この複雑化する世の中に處するに、あまりに人は忙しければ墮落を促すものであると、電車の乗降りに際して人々の現はす態度を引證して、是等を化導するには必ず教に俟たねばなるまいと、教法の重要なるを明し、而して吾人は單獨に孤立さる

べきでなく、皆共同生活を營むものであるから、お互は人々の爲めに竭し合ふことである。けれどもこれは云ひ易く行ひ難いからそこに生きた事實を手本として策勵してゆく、それには日蓮聖人を見よと、大聖人の三大特色を撰述されて、聴衆の心に深く貴い種を植付けられた。

陸軍省新聞班の市田一貫氏が、河合陟明氏の紹介で出講された大要は『東亞の情勢と帝國』といふ題であつて、そこに露西亞の問題、支那の問題及び歐米諸國の東洋に於て相當勢力を有する國々の關係に就て、一時間前後話されたのである露西亞の東亞に於ける計畫は、その軍備に於て西伯利亞鐵道なり、同地方に於ける重工業の發達等を考察し、又外蒙古や新疆への發展振りを何と見てよいか、國境の紛擾に就ても重大な關係を持つべきであると論じ、次に支那問題としては北支の自治運動に關して詳説し、更に張北事件のことや、赤化運動の活躍状況を述べ、反日國民黨及共產軍の提携等に就ても耳よりのことを發聞し、次に北米の野心や、英國の功利主義、其他いかに東亞の風雲尋常ならざることを認識せしめられ、我帝國は弱肉強食の陋習を打破し、公明正大にして共存共榮の大道に順據し、以て他國をリードすべき天命責任を有するものであることを強調され、多大な感激を與へられ拍手裡に降壇。

次に河合陟明講師は『歴史と我等の使命』の下に、過去の

西哲より説きおこして東西精神文化の粹を蒐め、遂に大聖釋迦牟尼佛に統一し、佛祖の法統正系を力説し、現下の時局に對して第一線に活躍すべく本團の淨業目的を説き、最後に上田辰卯理事長の『挨拶』として、本團の如き教化事業は他の現世利益にのみ偏重して迷信じみた事を以てする類似宗教團體と異り、殆んど諫言耳に進み如き有様で、迷信打破、宗教道德の合一、立正安國の唱導、佛性覺醒の運動等には理解を持つ人も尠なく、毎月例會には來會者の數多からざるは寧ろ當然である。然るに一朝有事の場合には御利益信心に罪障振ひせる者も尻餅をつくその時こそ、我等の教化に賛同せる者は光を發するのである。白晝の電燈は人皆心付かぬが、日没して暗夜となつては光輝燦然と耀く如く、吾等の淨業は平時には現世利益あるのだが心付かない、イザといふ場合に偉大な得益を感じるのである、而かもこれが一般にはなか／＼會得するには困難らしいのである。されば本團は人の多少はさう心に懸けない、唯其の質の如何に向つて努力を拂ひ、尠くとも眞に立派な人格者を一人から一人へと傳へむことを念願する次第であると結ばれ、滿堂の來聽者に深い反省と懺悔を與へられた。

小西日喜師の『國體明徴と日蓮主義』といふ講話ある筈なりしも時間の關係上午遺憶次回を期し、講演の幕を閉ぢて、清興に移つた。

琵琶講演の宗家である水也田吞洲氏が、十八番の日蓮聖人傳記も、この場合屋上屋を架すやうに思はるゝので、方面を換へて、今日の佳節に意義深い『乃木將軍』の一曲を弾じ且つ語られた。始めてかゝる琵琶講演を見聞された人も相當あつて、又藝術を通して一種の貴い感化を與へられたことは、その閉會後に於ける聴衆の聲に依つて窺はれ、我等亦歡に堪えない處である。かくて記念すべき此の日の清集も午後六時感謝の裡に大團圓となつた。各自は供養された小冊子を懐にして、内外俱に晴々しく袂を別ちつゝ、又の日を期した。

法華經講座と日曜清集 毎月常例の通り營まれてゐる。寒さも最早や凌ぎよくなり、これから外出にも宜い時候となり殊に本月は彼岸月であり、旁々各位の知友御誘合せて信心をはげみ、萬代悔なからしめたいと思ふ。聖訓に曰く『三界は安きこと無し猶火宅の如し、とは如來の教へ、諸法は幻の如く化の如しとは菩薩の詞なり。寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし、本覺の柄を離れて何事か樂みなるべき。願くは現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞後世の弄引なるべけれ。須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ陀をも勤めんのみこそ、今生人界の思出なるべき』

南無妙法蓮華經

横濱教誌

磯部先生を中心とする當地第十回の寒行會は、一月六日夜より二月四日に至るまで、會員諸氏が各家庭を開放されることにより、連夜、一日の休みもなく、寒三十日を通して行はれたのであつた。磯部先生は、東京小石川の統一園本部から殆んど毎夜御來濱下されて、讀經に講演に、慈々として生きた教を御示し下されたには、全く感激の外はなかつた。小西日喜上人が、又、小松川の遠きから數回御見え遊ばされたのも、ありがたき極みであつた。我々會員としても、毎夜熱心に出席する者多く、三十夜を通して無缺席の人、高田傳六氏、高橋傳氏、京田爲太郎氏、大内正工氏夫人の四名を挙げ得たのを以つても知ることが出来るのである。

寒行會中は、正七時勸行開始、毎夜法華經を一品づゝ讀誦唱題回向の後、磯部先生より、その夜に拜した品々の適要を承つたのである。小西上人は、その都度適當な一場の法話を開陳なされた。

最終の二月四日は、その日の午後より近來稀有の大降雪となつたが、磯部先生は東京に御用あつて、幸ひ小西上人の御來濱を得、神奈川の金子家で登まれたが、この烈しい吹雪を冒して参加された人々の中に、高田氏齋田氏及び大内、高橋の二夫人あつたことは實に稀有な全く奇特の至りで、吾等の

た。引續き直ちに送別會に移り、二年細谷宗司君の送別の辭あり、次いで校長先生、吉松先生、支部を代表して岩井支部長等より有益なる御訓話を頂き、それに對して前幹事橋本君より答辭あり。後座談會に移りしも、先生の御歸京の都合で時間の足らざるを憾み、卒業生諸兄の御健康を祝福して四時二十分閉會す。

台灣教報

以上

台中我布教所に於ける寒行は、毎年他寺院の行事とは更に異なり、去一月七日台灣新聞の報する如く、寒三十日間は毎夜七時より十一時迄四時間は、市内を讀經しつゝ往來し、途中適所々々の辻路に於ては辻說法二ヶ所又三ヶ所に於て行ひ了つて、更に同十一時より公園中の島に至り池邊に於て『立正安國』の新編三時間に亘り讀經を了し、丁度歸所するは翌朝二時四十分となり、以上毎夜七時間と四十分宛の寒修行を首尾に修了す。

我が顯本のみは毎年市民一般の歡迎をうけ居り、殊に本年は市民に對し多大の感動を興へ、修行の効果も大なるもの有るを認む。

二月四日節分に際し我布教所に於ては、俗に云ふ星祭として國禱會を執行し。

午後七時半より國禱會法要、續いて『宗教と道德』と題し

誇りとする處である。信仰の烈火は何物をも焼き盡す、況んや尺餘の積雪疾風如きはもの、數でないといふ事實を眼前に示され、お互妙法經力の功深を讃歎する念彌々強く、一層其信心を策勵して二世悉地成辨を祈る。

福島支部報

一月三十一日(金)午後七時久し振りにて磯部先生を御迎へして、大町中村様方にて例會。當日は、金澤様御令息の一週忌なるにより法要を兼ねてお勸行を嚴肅に行ふ。先生には新年に際しての御所懐を述べられ、我々の生活態度を明示せられ、又信仰生活の歡喜にふれられた。會員一同は先生の深き信仰の送りを感じ、益々信仰生活の充實化を誓つた。座談會に移つてから、岩淵先生の日本の建國精神に就き縦横に熟辯を振はれた。當夜は物凄吹雪であつたにも拘らず、會員多數出席せられた事は實に喜びに堪へなかつた、彌々信仰の尊さを感じる次第である。

二月一日(土)午後一時半、高商日蓮聖人讚仰會例會 本日の例會は、昭和十年度最後の例會なるにより、兼ねて三年生諸兄の送別會を行ふ。伊藤校長、會長吉松教授、支部團員の方々御出席下さる。

磯部先生には「日蓮主義の本領」なる題の下に、聖人の生立、人格、及び主義、主張等に就き御懇切なる御講話をされ

講演を試みたるに、多數の聽衆も感激し盛大に終了同十時半となる。



寄附金維持及團費誌料領收

(自二月二十一日至三月二十日)

一金貳拾圓也	台中 松橋 妙明殿	一金壹圓貳拾錢也	千葉縣 重木 博殿	一金貳圓五拾錢也	大阪 東 峰太郎殿
一金貳圓五拾錢也	東京 吉田かつゑ殿	一金貳圓五拾錢也	滋賀縣 木内の子殿	一金貳圓貳拾錢也	群馬縣 増田清三郎殿
一金壹圓也	大阪 岩見實太郎殿	一金壹圓五拾錢也	東京 齊藤 昭行殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 齊藤 昭行殿
一金貳圓五拾錢也	福島 原田 清澄殿	一金參圓也	同 朝 鮮 同田 志可殿	一金拾圓也	東京 井上道太郎殿
一金貳圓五拾錢也	同 中村興四郎殿	一金五圓也	同 誠志堂書店殿	一金壹圓也	同 小峰 豊子殿
一金貳拾圓五拾錢也	同 中村 美津殿	一金貳圓五拾錢也	同 緒引 弘殿	一金貳圓貳拾錢也	同 内海 頼二殿
一金拾圓也	東京 井上道太郎殿	一金貳圓也	同 宇野 博順殿	一金貳圓五拾錢也	同 直井良一郎殿
一金五圓也	同 伊勢地丸子殿	一金壹圓也	同 金子 光和殿	一金貳圓貳拾錢也	同 同 林田 義夫殿
一金壹圓也	同 加藤重太郎殿	一金壹圓也	同 原 和子殿	一金壹圓貳拾錢也	同 同 石田よしの殿
一金貳圓貳拾錢也	同 飯島 昭二殿	一金貳圓也	同 松岡 ふゆ殿	一金壹圓貳拾錢也	
一金壹百圓也	同 堀 江殿	一金五拾錢也	同 宮島 はる殿		
一金貳圓貳拾錢也	同 伊藤 夏子殿	一金參圓也	同 萩田浅次郎殿		
一金貳圓貳拾錢也	同 櫻井惣右衛門殿	一金貳圓貳拾錢也	同 永島 三郎殿		
一金六拾錢也	大阪 山乃神傳道閣殿	一金貳圓也	同 沼部彌太郎殿		
一金參圓也	東京 齋地 雄三殿	一金貳圓四拾錢也	同 沼部彌太郎殿		
一金貳圓五拾錢也	同 長深 信一殿	一金貳圓五拾錢也	同 高野 魚雄殿		
一金貳圓貳拾錢也	同 平松 市藏殿	一金貳圓貳拾錢也	同 鳥山火次郎殿		
一金六圓也	同 池田悦太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	同 石田 耕一殿		
一金貳圓貳拾錢也	同 鎌倉 野元 盛幹殿	一金壹圓貳拾錢也	同 島根縣 長岡 義實殿		

右難有領收入帳仕候也

財團法人統一團會計

團費誌料滞納の方は、乍恐縮この非常時活動資源として、一本の煙草を節してもどうか御持込み頂くことを爲白他、御實前にお祈り致して居ります。又御都合されればせめてお禮書の一枚も下さい。讀みたいが今勝手が悪いといふ方には贈呈致します。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改版 賜天覽	特價	全	金壹圓八拾錢
法華經要義	特價	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	特價	全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	特價	全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值	特價	全	金貳拾五錢
法華經要品	特價	全	金五拾錢
日生上人レコード	特價	全	金參圓廿五錢
日蓮聖人	特價	全	金拾錢
本尊意識に就て	特價	全	金貳拾錢
河合彰明著	特價	全	金壹圓七拾錢
皇道と日蓮主義	特價	全	金拾錢

東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團法人統一出版部
振替東京九四〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六一ノ七

「教」誌

發行所

發行所 財團法人統一團

東京市小石川區音羽町六一ノ七
電話牛込五三三六番
振替東京九四〇番

昭和十一年二月廿四日 印刷納本
昭和十一年三月一日 發行

（第四百九十二號）

注意

- ▲御申込ハ總テ前金ノ事
- ▲前金相付候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
- ▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

製復許不

東京市小石川區音羽町六一ノ七
編輯人 磯部 滿事
發行人 磯部 滿事
印刷人 大辻松太郎
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

目 次

釋尊降誕を慶讃して(完結)	本多日生
信仰と修養	守屋貫教
釋尊と我日本文化	高楠順次郎
法華經講話(第二十八講)	小林一郎
記事	

○本部團報 ○寄附金維持及團費誌料領收

第十四年四月號



統

一

法附
人團
統

團
發
行